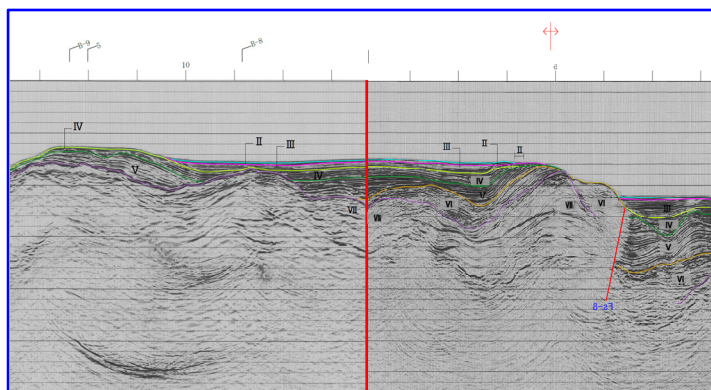


(3) 敷地前面海域との地層の連続性

② 地層の連続性 (敷地前面海域とE海域及びB海域) (3/3)

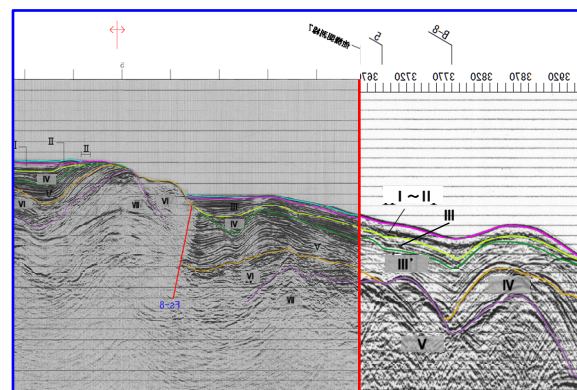
一部修正 (H28/9/30審査会合)



測線k

測線B-7

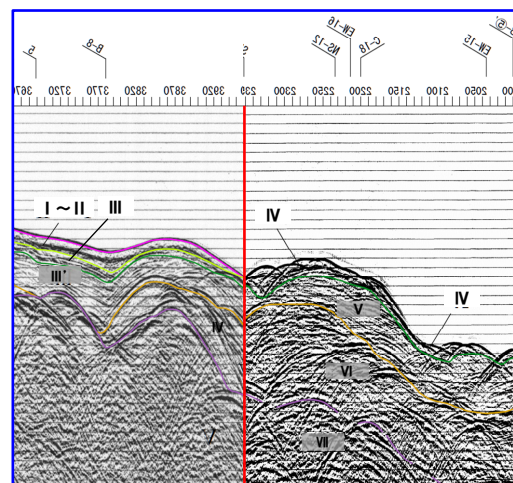
交点①の拡大図



測線B-7

他機関測線7

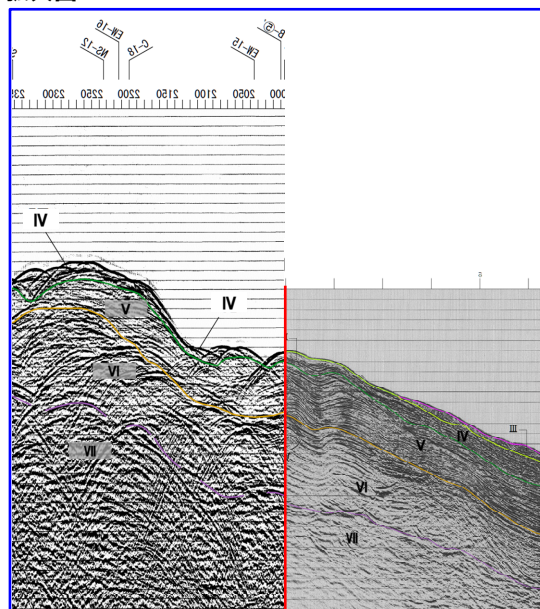
交点②の拡大図



他機関測線7

他機関測線12

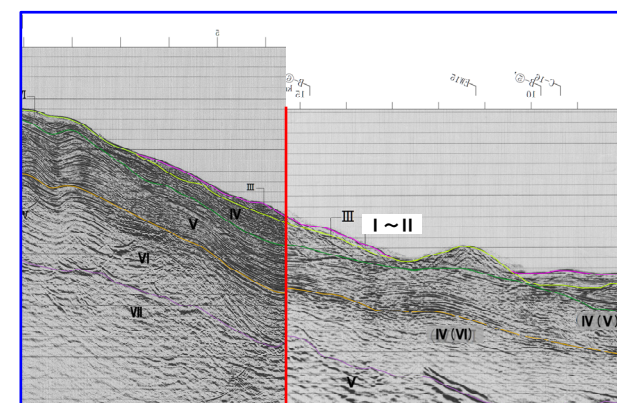
交点③の拡大図



他機関測線12

測線C-17

交点④の拡大図



測線C-17

交点⑤の拡大図

測線3B-1A

凡 例

- I ~ II 層 (中部更新統～全新統)
- III 層 (下部更新統～中部更新統)
- IV 層 (始新統～鮮新統)
- IV (V) 層 (上部中新統～鮮新統)
- IV (VI) 層 (始新統～上部中新統)
- V 層 (始新統以下)

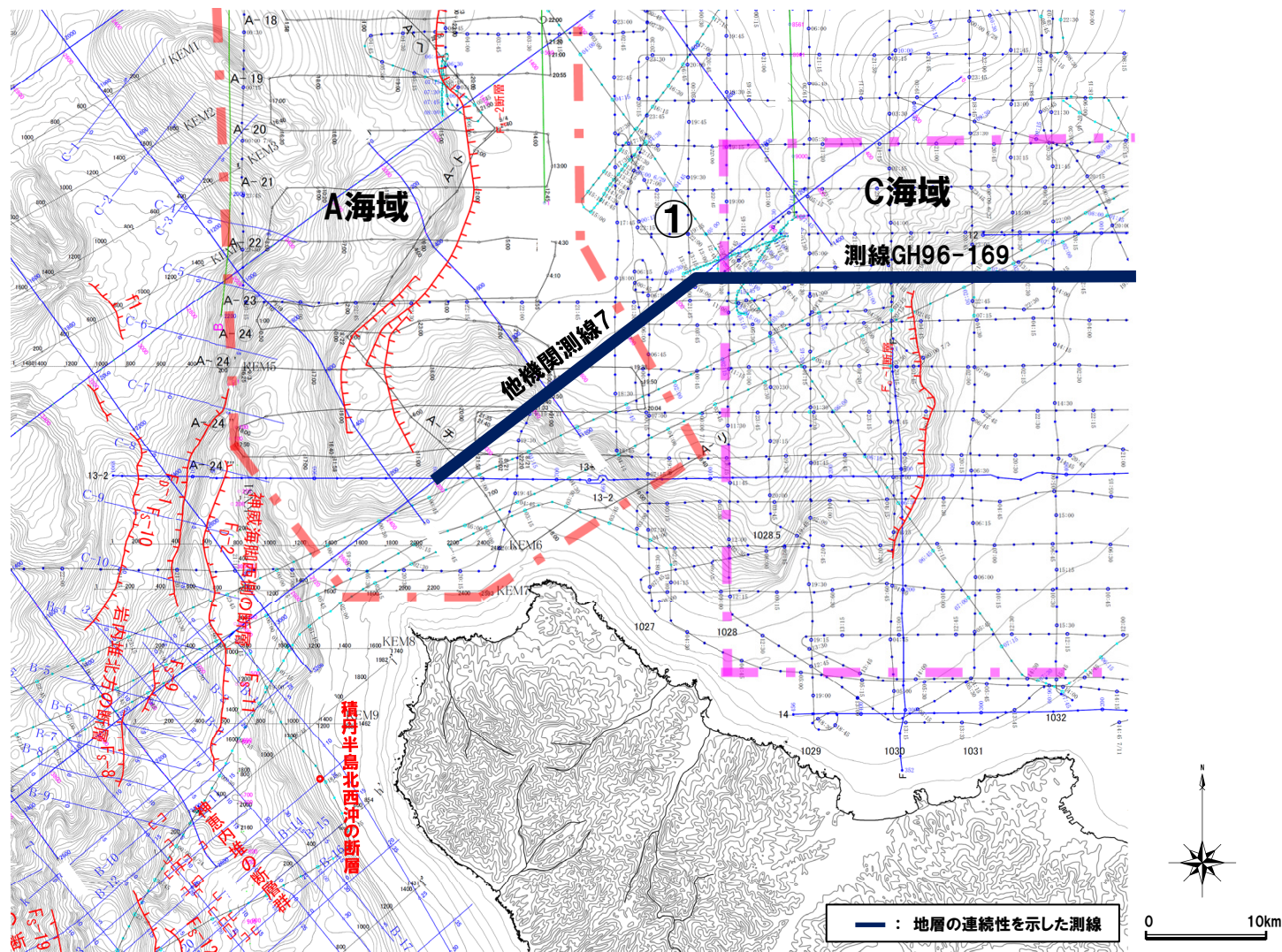
※色付線は各層の上面を表す

(3) 敷地前面海域との地層の連続性

③ 地層の連続性 (A海域及びC海域) (1/2)

一部修正 (H28/9/30審査会合)

○A海域及びC海域の地層区分については、海上音波探査記録の交点において連続性を確認している。



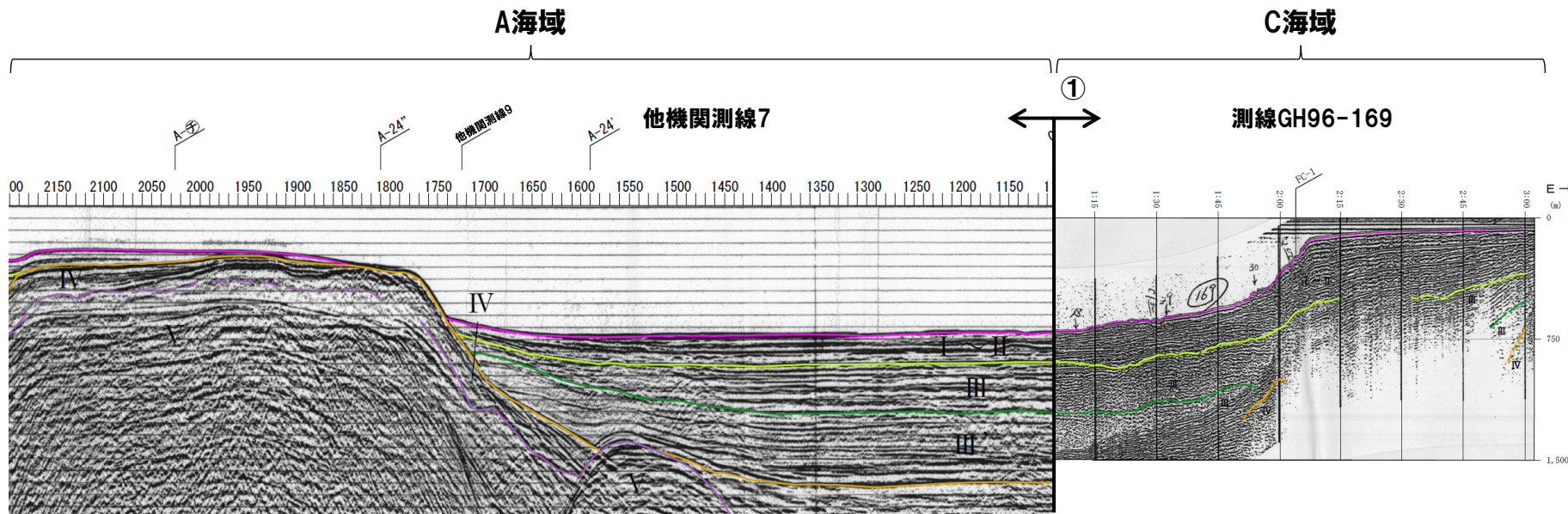
音波探査測線平面図

(3) 敷地前面海域との地層の連続性

③ 地層の連続性 (A海域及びC海域) (2/2)

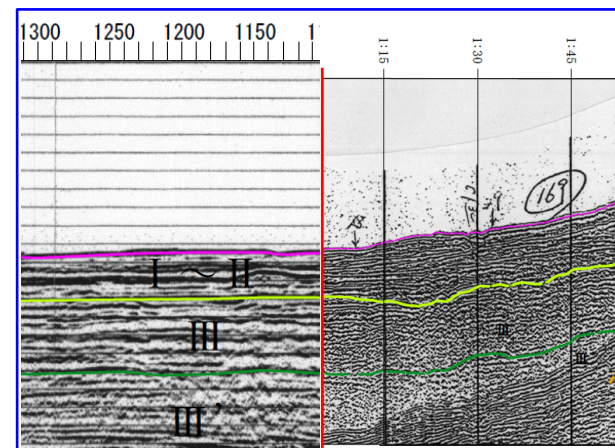
一部修正 (H28/9/30審査会合)

○A海域からC海域まで、交差した測線によって、地層の連続性を確認している。



音波探査解析図

地質時代		記号	A, C
		敷地前面海域	
第四紀	完新世	I	I
	後期	II	I ~ II
	中期	III	III
	前期	IV	III'
新第三紀	鮮新世	V	IV
	中新世	VI	V
古第三紀	漸新世		
	始新世		
先第三紀	暁新世	VII	



他機関測線7

測線GH96-169

交点①の拡大図

余白

2. 敷地周辺陸域における個別断層の評価

2.1 評価結果一覧

① 評価結果一覧 (1/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

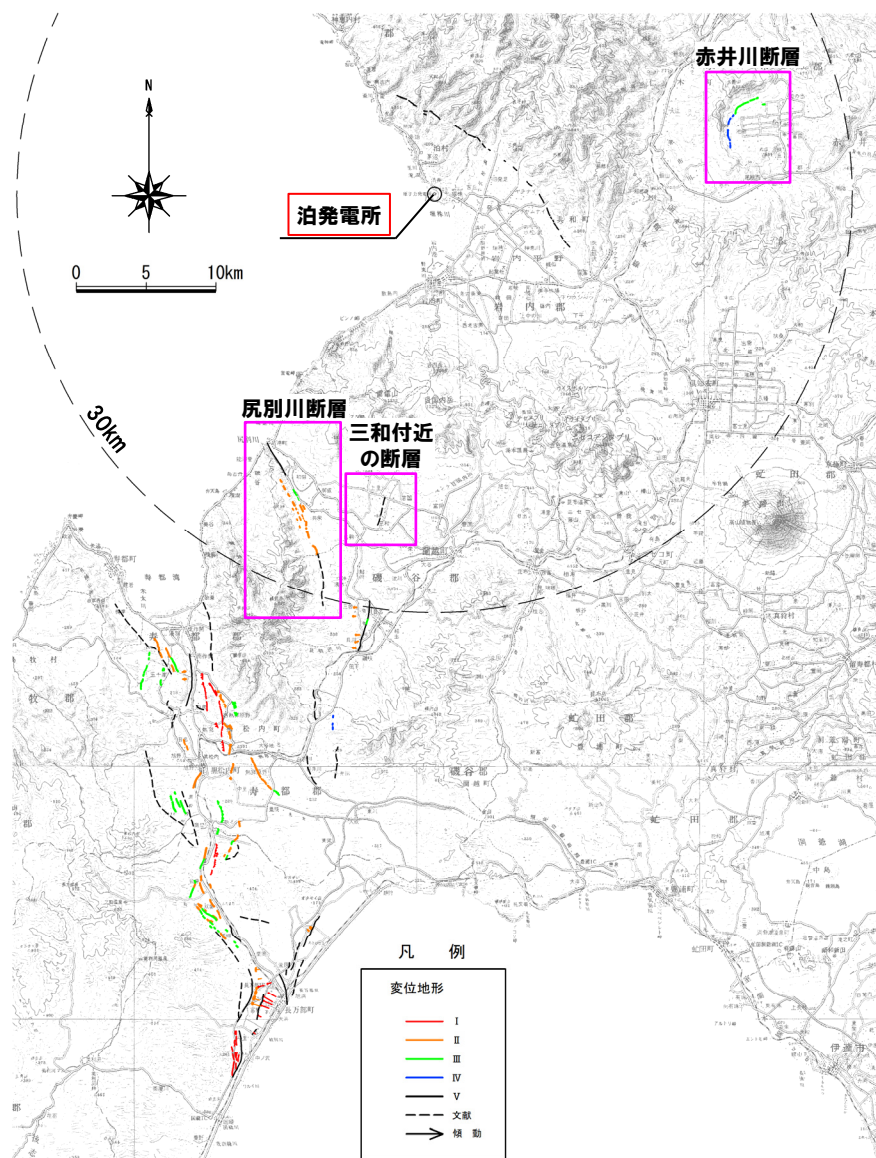
断層名	文献調査	地形調査	地質調査	総合評価	断層長さ (km)
赤井川断層 (詳細は本編資料P26～P28参照)	【活断層研究会編(1991)】 ○確定度: I ○活動度: B ○長さ: 約4km及びこれに並走する約1km(北西側隆起) 【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○活断層研究会編(1991)とほぼ同じ位置に推定活断層 ○長さ: 約4km(北西側隆起) 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○赤井川盆地はカルデラ状の盆地で、山地と盆地の境界部には開析され丘陵状を呈する崖錐Ⅰ及び比較的開析されていない低位に位置する崖錐Ⅱが分布している。 ○山地と盆地の境界付近及び崖錐Ⅰ末端部付近には、NE-SW方向～N-S方向に直線状の低崖及び遷緩線が断続的に認められる。	○新第三系上部中新統俱知安層群の安山岩質火砕岩、新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統赤井川火山岩類の安山岩溶岩及び同質火砕岩が分布し、低地には、第四系下部～中部更新統赤井川粘土層が分布している。 ○変位地形が認められる位置は、地表地質調査の結果を踏まえると、俱知安層群と赤井川粘土層の境界にほぼ一致しているものと推定される。	○変位地形が認められる位置は、地表地質調査の結果を踏まえると、俱知安層群と赤井川粘土層の境界にほぼ一致しているものと推定されることから、断層変位によるものではなく、カルデラ形成により生じたカルデラ湖に堆積した赤井川粘土層と基盤の俱知安層群の地質境界である可能性がある。 ○しかし、崖錐の上及び末端部の崖が連続することから、崖錐形成時以降に活動した断層が存在する可能性は否定できず、また、後期更新世以降の活動性が明確ではない。 ○これらのことより、赤井川断層については、後期更新世以降の活動を考慮する。	約5km
尻別川断層 (詳細は本編資料P29～P35参照)	【活断層研究会編(1991)】 ○確定度: III ○活動度: C ○長さ: 約12km(西側隆起) 【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○尻別川左岸に推定活断層 ○長さ: 約10km(西側隆起) 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○磯谷山地と尻別川低地の境界付近にNNW-SSE方向の遷緩線とその南方の小規模な丘陵の基部に低崖が認められる。 ○磯谷山地内の逆向き崖及び鞍部が断続的に認められる。 ○NNW-SSE方向にMf1段丘面上の低崖及び遷緩線が認められる。	○地質構造は、尻別川左岸の磯谷牧場から茅沼川付近にかけては、新第三系上部中新統磯谷層及び新第三系鮮新統～第四系下部更新統尻別川層との地質境界付近の急傾斜帯で特徴づけられる。 ○上記範囲の北方及び南方においては、尻別川層は緩傾斜を呈する。	○地形調査及び地表地質調査結果より、Mf1段丘面上に低崖、尻別川層に撓曲構造が認められる。 ○反射法地震調査結果より、尻別川河口では左岸側の磯谷層を隆起させた活動が推定されるが、その変位・変形は、上位の鮎川層(第四系下部～中部更新統)内まで及んでいないと推定される。 ○これらのことより、尻別川断層はMf1段丘面等に変位地形が認められることから、中期更新世以降の活動は認められるものの、最新活動時期については明確ではないことから、後期更新世以降の活動を考慮する。	約16km
三和付近の断層 (詳細はP98～P101参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○尻別川右岸の蘭越町三和に推定活断層 ○長さ: 約2km(西側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○文献に示される断層位置は、尻別川とベンケ目国内川の合流点付近から北のVL1火山麓扇状地と丘陵との地形境界、北端ではVM火山麓扇状地とVL1火山麓扇状地を境する低崖付近である。 ○しかし、これらの地形は河川の流下方向と調和し、長さが短い。	○三和付近の断層の西側は、淘汰が悪く層相変化が激しい第四系中部更新統三和層が分布しており、洞爺火砕流堆積物にほぼ水平に覆われる。 ○三和付近の断層の東西に分布する洞爺火砕流堆積面の分布標高には差が認められない。	○地形調査結果より、三和付近の断層周辺では、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。 ○地表地質調査結果より、三和付近の断層を挟んで東西に分布する洞爺火砕流堆積面の分布標高には差が認められない。 ○これらのことより、地形調査で認められる崖は、河川の流下方向と調和し、長さが短いこと等から、河川による侵食崖である可能性が高いと考えられ、三和付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。	—

 : 震源として考慮する活断層

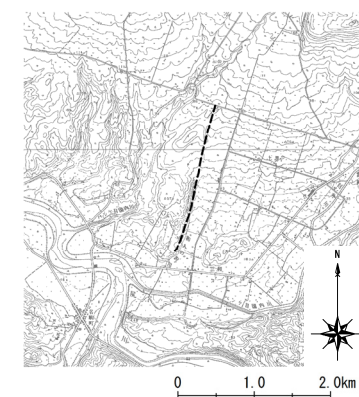
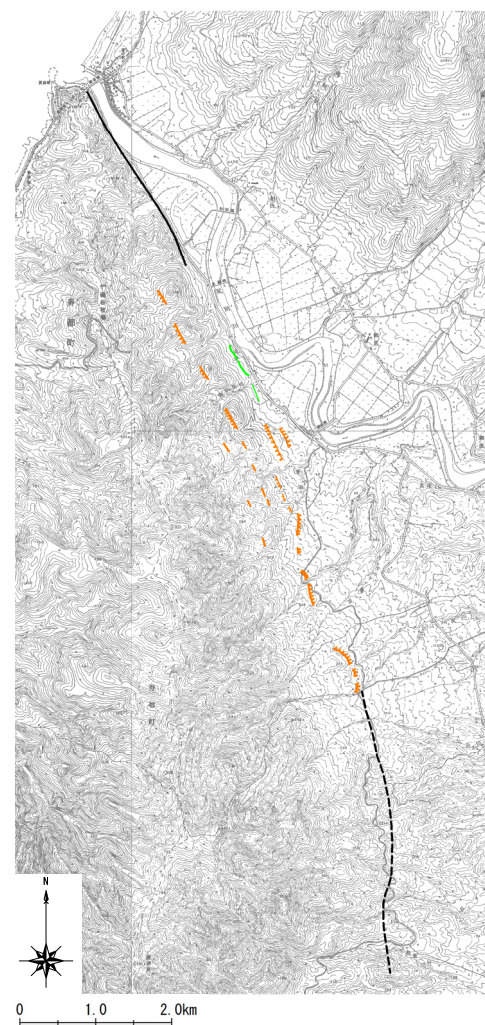
 : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

① 評価結果一覧 (2/6)

再掲 (H27/10/9審査会合)



敷地周辺陸域の変位地形分布図



2.1 評価結果一覧

① 評価結果一覧 (3/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

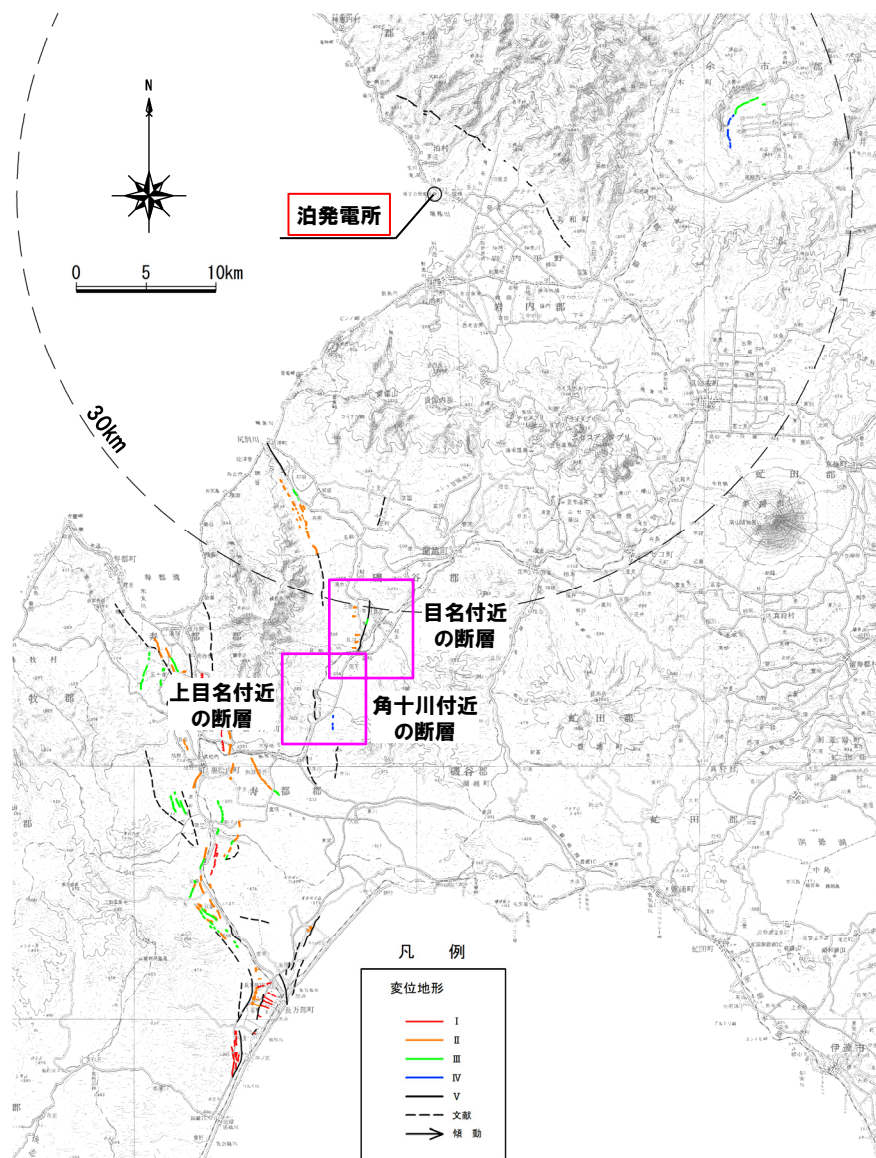
断層名	文献調査	地形調査	地質調査	総合評価	断層長さ (km)
目名付近の断層 (詳細は本編資料P37～P44参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○尻別川右岸の蘭越町目名付近に活断層 ○長さ: 約4km (西側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○調査地域付近には, 目名川沿いの低地で, 周辺には低位及び高位の河成段丘面, 洞爺火砕流堆積面等が分布している。 ○Lf2段丘面とAf段丘面の間に低崖が認められる。 ○この低崖は, 南東側の山地から連続するAf段丘面及びこれを形成する小河川とほぼ直交すること, 地形面及び河川の勾配に対して逆向きを示すことから, 小河川の河食崖として判断し難い。	○目名付近の断層周辺には, 新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層が分布し, これを高位, 中位及び低位の各河成段丘堆積物並びに洞爺火砕流堆積物等が覆って分布している。 ○区分Ⅲ及び区分Ⅴとした区間の西側の, 三之助第一川からボン貝殻沢川にかけての区間には, 尻別川層内にN-S方向の褶曲が認められる。 ○区分Ⅲ及び区分Ⅴとした区間は, これらの褶曲の最も東側の背斜構造と調和的である。	○地形調査結果より, 蘭越町三笠南方のLf2段丘面とAf段丘面の間に低崖及びその西方に並走するHf2段丘面に西向きに傾斜が認められる。 ○ボーリング調査結果より, 変位地形北方延長部の蘭越町三笠付近で, 第四系中部更新統三和層の基底に不連続が認められるものの, 洞爺火砕流堆積物の基底に変位・変形は認められない。 ○しかし, ボーリング地点における洞爺火砕流堆積物の分布標高は, 周辺の洞爺火砕流堆積面の分布標高と比較して, 若干高い状況が認められる。 ○これらのことより, 目名付近の断層は, 後期更新世以降の活動が否定できないことから, その活動を考慮する。	約5km
上目名付近の断層 (詳細はP103～P107参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○蘭越町上目名付近に推定活断層 ○長さ: 約2km (東側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○文献に示される断層位置付近では, 南北に延びる丘陵状の高まりが認められ, その西側に幅の広い鞍部が認められるが, 断続的で短い。	○上目名付近の断層周辺には, 西側の山地に花崗岩類が, 東側の丘陵に新第三系鮮新統賀老山(がろうさん)火山岩類の安山岩及び火砕岩が分布しており, それらの間を新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が覆っている。	○地形調査結果より, 上目名付近の断層周辺では, 区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。 ○地表面踏査及びボーリング調査結果より, 上目名付近の断層付近には, 地形から推定される東側隆起の断層の存在を示唆する構造は認められない。 ○上目名付近の断層の東側の丘陵状の高まりには, 賀老山火山岩類の安山岩及び凝灰角礫岩が分布することから, 岩質の相違によって形成された組織地形と判断される。 ○これらのことより, 上目名付近の断層付近には, 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。	—
角十川付近の断層 (詳細はP108～P112参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○黒松内町の町営牧場北東に推定活断層 ○長さ: 約1km (西側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○調査地域付近は, 黒松内町の町営牧場北東部の山間部であり, Hf1段丘面, 崖線等が分布している。 ○やや急峻な山地の山麓の短い区間に孤立丘状の高まりが断続的に分布している。	○角十川付近の断層周辺には, 新第三系鮮新統賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び安山岩が分布しており, これを第四紀更新世の崖線堆積物及び風成層が覆っている。	○地形調査結果より, 黒松内町の町営牧場北東部には, やや急峻な山地の山麓の短い区間に孤立丘状の高まりが断続的に分布している。 ○角十川付近の断層中央部におけるボーリング調査結果より, 基盤岩の上面の分布は, 西側が高くなっているが, 破砕帯等の断層の存在を示唆するような構造は認められない。 ○角十川付近の断層の南方のHf1段丘面におけるボーリング調査結果より, 基盤岩の上面は, 変位地形の延長部を挟んで緩やかに西側に傾斜して連続している。 ○これらのことより, 角十川付近の断層付近には, 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。	—

 : 震源として考慮する活断層

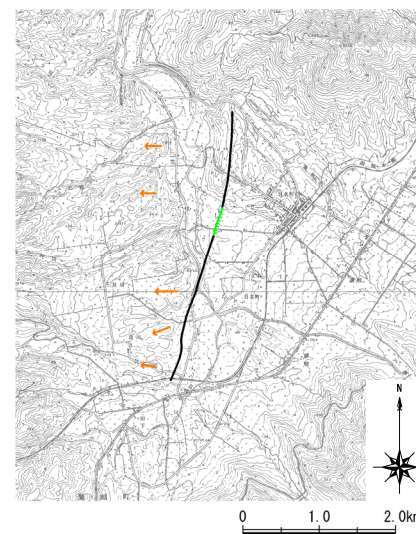
 : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

① 評価結果一覧 (4/6)

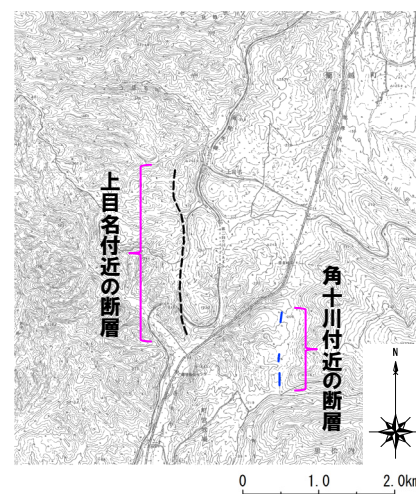
再掲 (H27/10/9審査会合)



敷地周辺陸域の変位地形分布図



目名付近の断層



上目名付近の断層・角十川付近の断層

2.1 評価結果一覧

① 評価結果一覧 (5/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

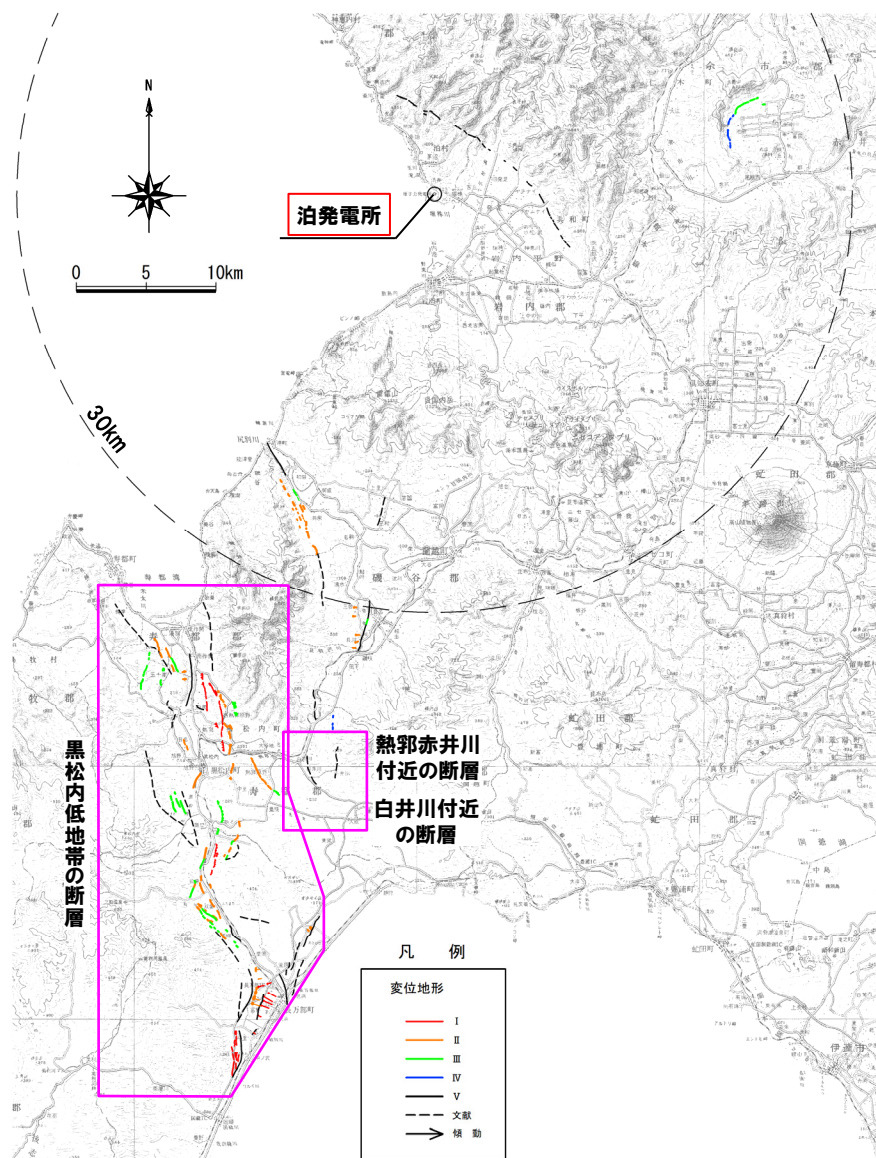
断層名	文献調査	地形調査	地質調査	総合評価	断層長さ (km)
白井川付近の断層 (詳細はP113～P117参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○黒松内町白井川地区に推定活断層 ○長さ: 約1km (東側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○文献に示される断層位置は, 白井川地区の東方にある丘陵と沖積低地との地形境界であり, その地形境界は長さが短く, 形態も不鮮明である。	○白井川付近の断層周辺には, 東側の丘陵に新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が分布しており, 西側の白井川沿いに第四紀完新世の沖積層が分布している。 ○白井川付近の断層及びその南方延長部を横断して, 洞爺火砕流堆積面の分布標高に差は認められない。	○地形調査結果より, 白井川付近の断層周辺では, 区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。 ○白井川付近の断層中央部におけるボーリング調査結果より, 尻別川層は東側へ15°程度の傾斜で連続し, 文献で示されるような東上がりの構造は認められない。 ○白井川付近の断層の北端部～南方延長には, 洞爺火砕流堆積面が分布し, その分布標高は, 西流する熱郭川の現河床勾配と調和的に流下方向へ高度を減じており, 白井川付近の断層及びその南方延長部を横断して, 洞爺火砕流堆積面の分布標高に差は認められない。 ○これらのことより, 白井川付近の断層付近には, 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。	—
熱郭赤井川付近の断層 (詳細はP118～P121参照)	【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○黒松内町赤井川地区に推定活断層 ○長さ: 約2km (東側隆起) 【活断層研究会編(1991)】 ○記載なし 【池田ほか編(2002)】 ○記載なし	○文献に示される断層位置は, 下角十川付近のやや急峻な山地の山麓及び赤井川南部の山麓に鞍部が不連続に認められる。	○熱郭赤井川付近の断層周辺には, 新第三系鮮新統賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が分布しており, これを高位の河成段丘堆積物が覆っている。	○地形調査結果より, 熱郭赤井川付近の断層周辺では, 区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。 ○地表地質踏査及びボーリング調査結果より, 下角十川南方では, 熱郭赤井川付近の断層を挟んでHf2段丘堆積物を覆うローム層の基底がほぼ水平に連続している。 ○これらのことより, 熱郭赤井川付近の断層付近には, 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。	—
黒松内低地帯の断層 (詳細は本編資料P45～P79参照)	【活断層研究会編(1991)】 ○白炭東断層(長さ5km, 確実度Ⅰ, 活動度B), 白炭西断層(長さ6km, 確実度Ⅰ, 活動度B), 長万部断層(長さ4km, 確実度Ⅰ, 活動度B)等を記載 【中田・今泉編(2002), 今泉ほか編(2018)】 ○寿都町歌楽町及び寿都町湯別町付近から長万部町中の沢付近にかけて, 複数の活断層, 推定活断層及び地形面の傾動を記載 【池田ほか編(2002)】 ○黒松内町白炭及び寿都町湯別町付近から長万部町中の沢付近, 長万部川左岸河口部及び長万部町旭浜周辺に複数の活断層を記載	○黒松内低地帯には, 褶曲及び撓曲構造に対応した長さ数kmのN-S方向及びNW-SE方向の変位地形, 並びにこれらの変位地形による多くの地形の高まり, 凹地等が認められる。	○黒松内低地帯には, 下位より新第三系下部～中部中新統訓縫(くぬい)層, 新第三系中部～上部中新統八雲層, 新第三系上部中新統二股層, 新第三系鮮新統～第四系下部更新統黒松内層, 第四系下部～中部更新統瀬棚層, 第四紀中期～後期更新世の段丘堆積物等が分布している。 ○黒松内低地帯の地質構造は, 大局的にはNW-SE方向の褶曲及び撓曲構造とN-S方向～NE-SW方向の褶曲及び撓曲構造で特徴づけられる。	○黒松内低地帯の地質構造は, 大局的に瀬棚層以下の西上がりの撓曲構造で特徴づけられ, これに関連した, 段丘面の傾動, 逆向き崖, 撓曲崖等の変位地形が寿都湾南方から内浦湾にかけて分布する。 ○一方, 黒松内低地帯北部の朱太川(しゅぶとがわ)河口及び寿都湾, 黒松内低地帯南方延長部の国縫沖南方では, 特徴的な瀬棚層以下の西上がりの撓曲構造は認められない。 ○これらのことより, 黒松内低地帯の断層は, 後期更新世以降の活動を考慮するものとし, 安全評価上, 約51kmの区間を一括して評価する。	約51km

 : 震源として考慮する活断層

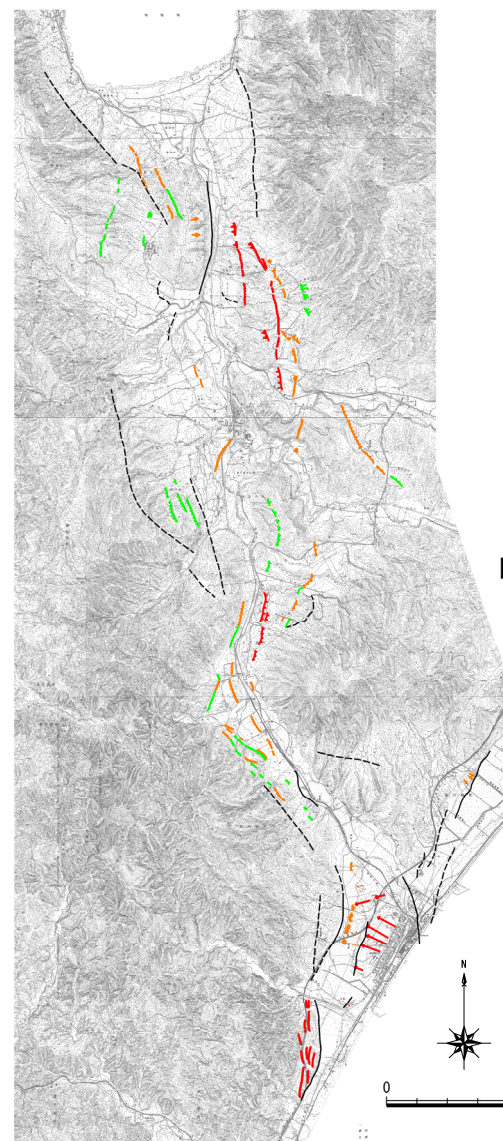
 : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

① 評価結果一覧 (6/6)

再掲 (H27/10/9審査会合)



敷地周辺陸域の変位地形分布図



白井川付近の断層・熱郭赤井川付近の断層

2.2 三和付近の断層

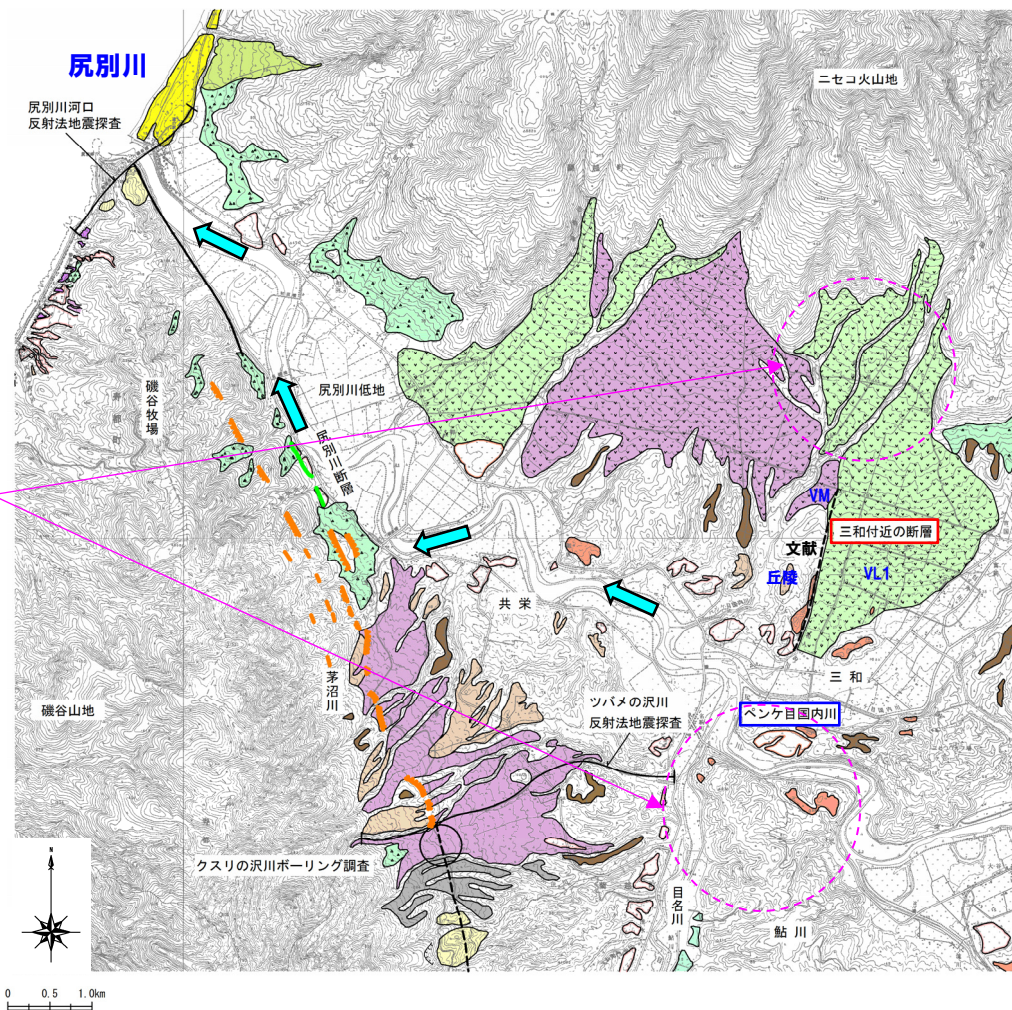
① 地形

再掲 (H27/10/9審査会合)

- 文献に示される断層位置は、尻別川とペンケ目国内川の合流点付近から北のVL1火山麓扇状地と丘陵との地形境界、北端ではVM火山麓扇状地とVL1火山麓扇状地を境する低崖付近である。
- しかし、これらの地形は河川の流下方向と調和し、長さが短い。
- また、北方延長のVL1火山麓扇状地及び山地、南方延長の丘陵にも区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。

- 北方延長のVL1火山麓扇状地及び山地、南方延長の丘陵にも区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。

凡 例			
地形区分			変位地形
Lf3段丘面		湧き火砂流二次堆積面	
Lf1段丘面		湧き火砂流堆積面	
Mf2段丘面		火山麓扇状地 (VL1)	
Mm1段丘面		火山麓扇状地 (VM)	
(断崖地帯の地形物及び崖線の地形物に覆われる部分)		崖線	
Mf1段丘面		地すべり地形・崩壊地形	
Hm3段丘面		砂丘砂	
Hf3段丘面			
Hm2段丘面			
Hf2段丘面			
Hf1段丘面			



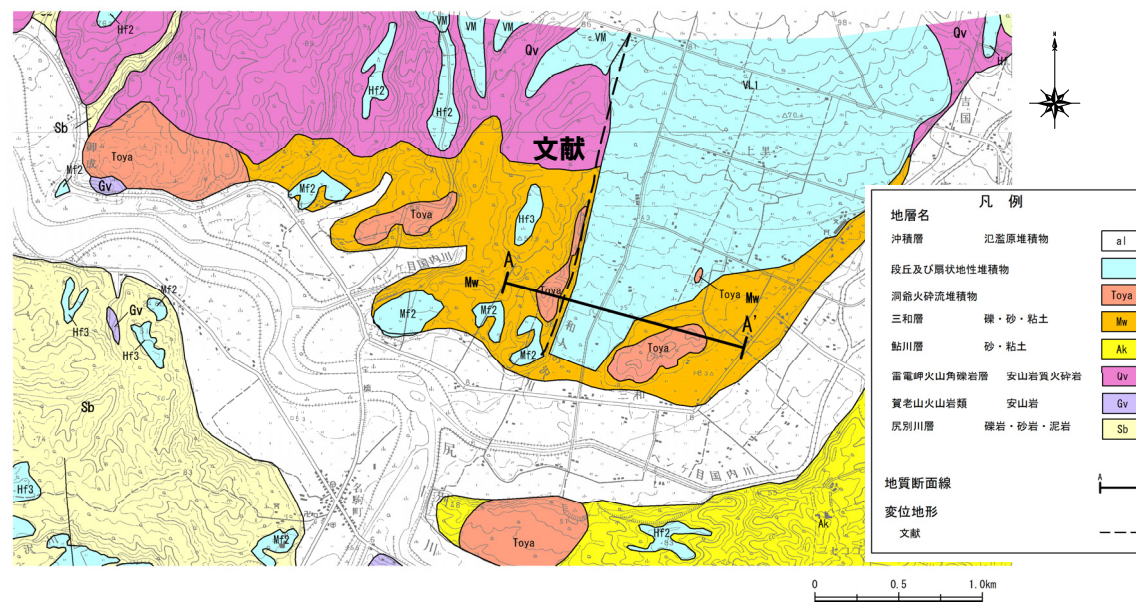
三和付近の断層周辺の地形分類図

2.2 三和付近の断層

② 地質・地質構造 (1/2)

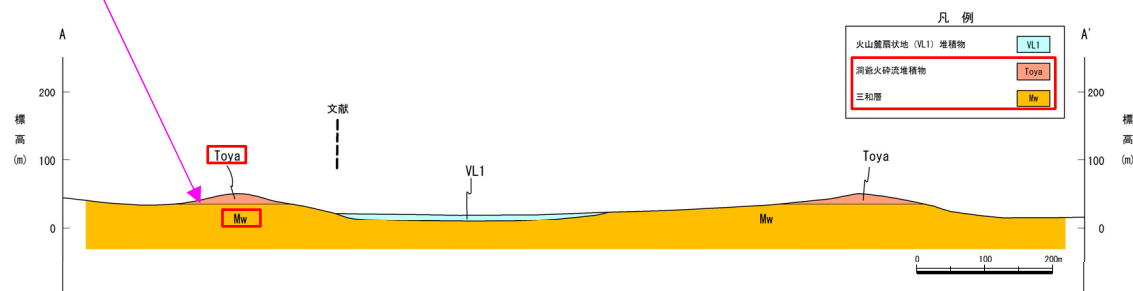
再掲 (H27/10/9審査会合)

- 三和付近の断層の西側は、淘汰が悪く層相変化が激しい第四系中部更新統三和層が分布しており、洞爺火砕流堆積物にほぼ水平に覆われる。
- 一方、東側では新鮮な礫層からなるVL1火山麓扇状地堆積物が分布する。



地質図

- 三和層は、洞爺火砕流堆積物にほぼ水平に覆われる。



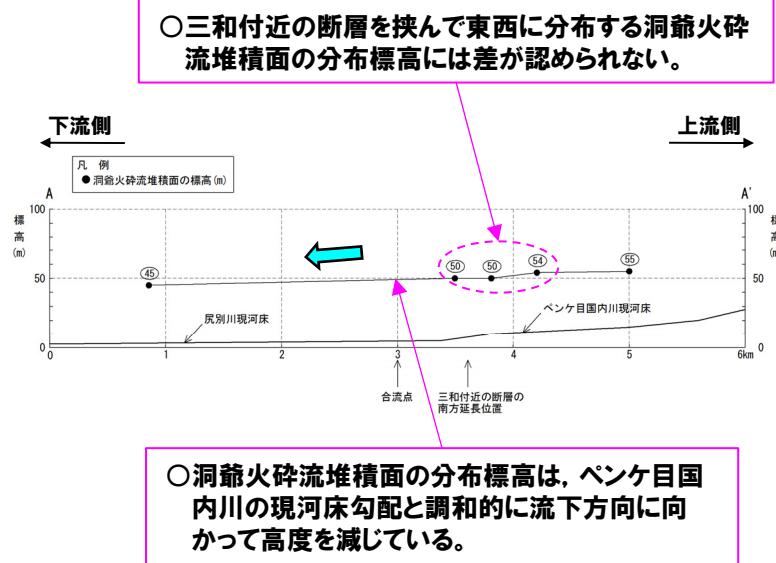
地質断面図

2.2 三和付近の断層

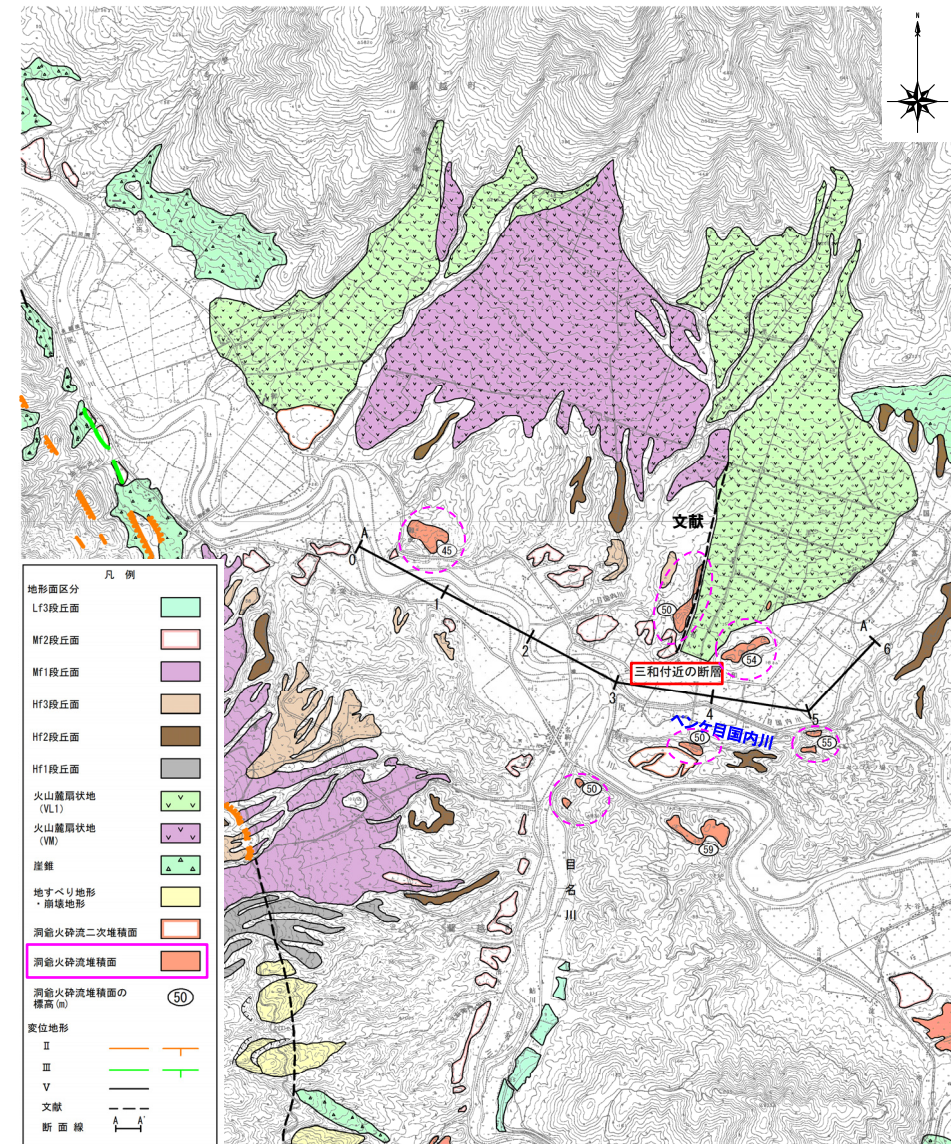
② 地質・地質構造 (2/2)

再掲 (H27/10/9審査会合)

- 三和付近の断層を挟んで東西に分布する洞爺火砕流堆積面の分布標高には差が認められない。
- 広域的にも洞爺火砕流堆積面の分布標高は、ペンケ目国内川の現河床勾配と調和的に流下方向に向かって高度を減じている。



ペンケ目国内川沿いの洞爺火砕流堆積面の分布標高 (投影)



三和付近の断層周辺の地形分類図

2. 2 三和付近の断層

③ 評 価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 地形調査結果より、三和付近の断層周辺では、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。
- 地表地質踏査結果より、三和付近の断層を挟んで東西に分布する洞爺火砕流堆積面の分布標高には差が認められない。
- これらのことより、地形調査で認められる崖は、河川の流下方向と調和し、長さが短いこと等から、河川による侵食崖である可能性が高いと考えられ、三和付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。

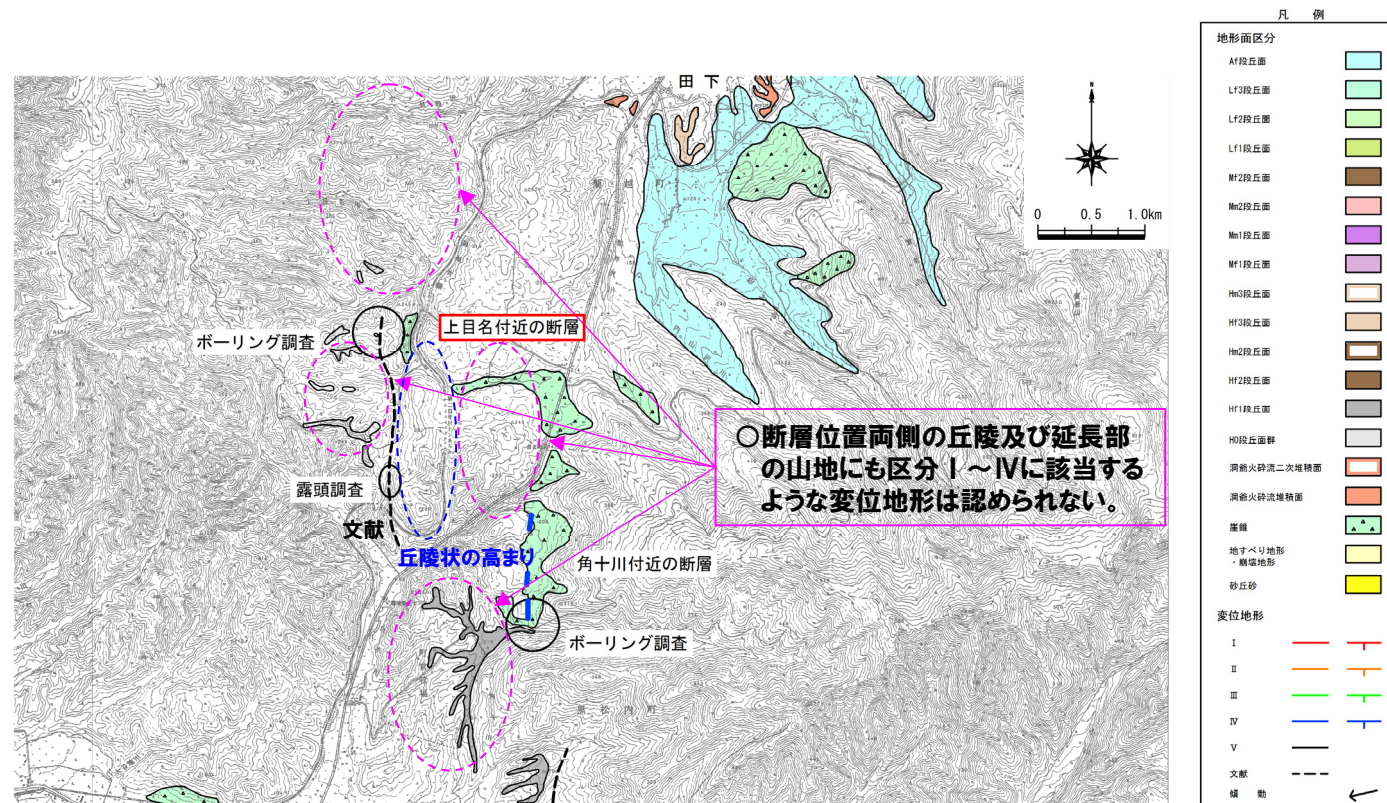
余白

2.3 上目名付近の断層

① 地 形

再掲 (H27/10/9審査会合)

- 文献に示される断層位置付近では、南北に延びる丘陵状の高まりが認められ、その西側に幅の広い鞍部が認められるが、断続的で短い。
- 断層位置両側の丘陵及び延長部の山地にも区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。



上目名付近の断層周辺の地形分類図

2.3 上目名付近の断層

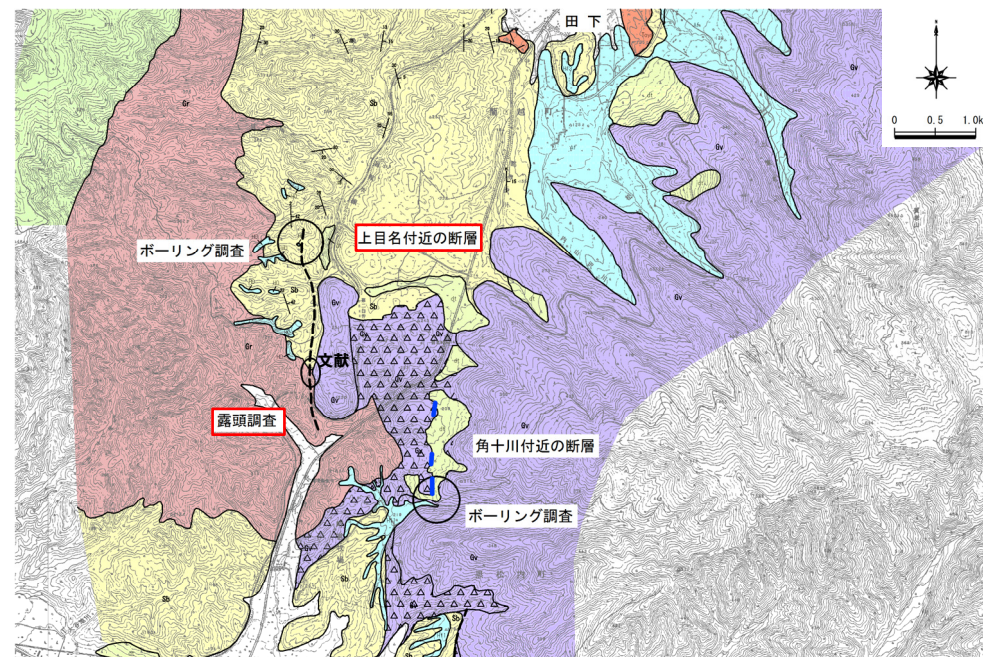
② 地質・地質構造 (1/2)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 上目名付近の断層周辺には、西側の山地に花崗岩類が、東側の丘陵に新第三系鮮新統賀老山(がろうさん)火山岩類の安山岩及び火砕岩が分布しており、それらの間を新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が覆っている。
- 上目名付近の断層南部で露頭調査を実施した(次頁参照)。
- 調査箇所は、上目名付近の断層を横断する約20m区間の露頭であり、当該地点は、花崗閃緑岩の分布が確認され、割れ目や風化は認められるものの、破碎帯等の断層の存在を示唆する構造は認められない。



調査位置図

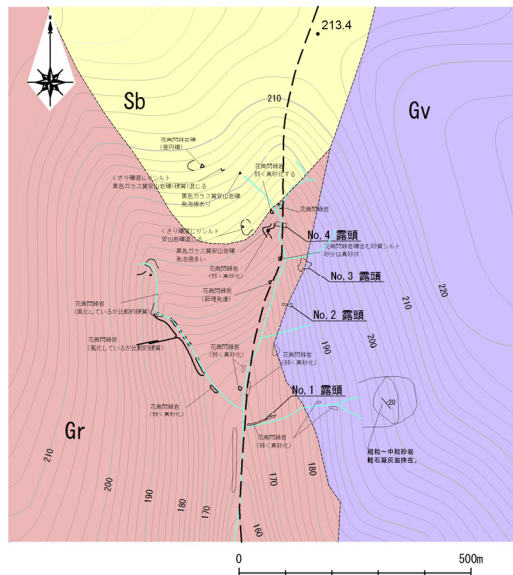


上目名付近の断層周辺の地質図

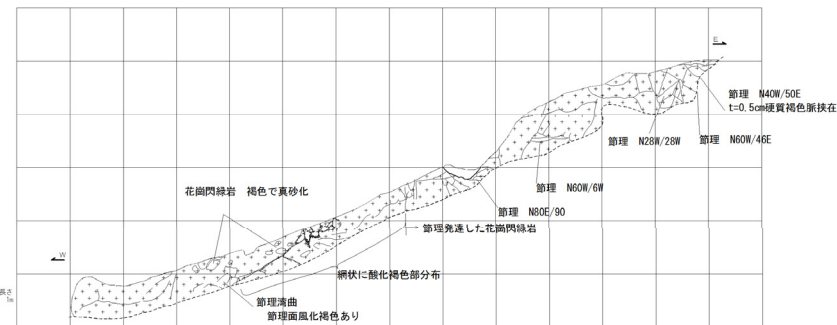
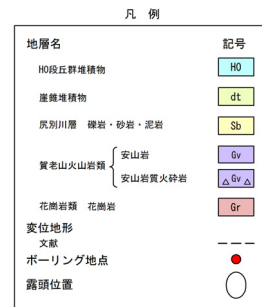
凡例	記号
地層名	
氾濫原堆積物	
段丘及び扇状地性堆積物	
礫層	dt
湖沼火砕流堆積物	Taya
三和層	細・砂・粘土
鮎川層	砂・粘土
賀老山火山岩類	安山岩 Gv
	安山岩質火砕岩 ΔGv
尻別川層	砂岩・礫岩 Sb
礫谷層	泥岩 Ind
	安山岩質火砕岩 (安山岩質基岩角礫岩) Itb
花崗岩類	花崗岩 Gr
記号凡例	
地質境界	
走向・傾斜	垂直 20° 逆転層
背斜軸 (隆起は伏在)	
向斜軸 (隆起は伏在)	
変位地形	
I	
II	
III	
IV	
V	
文献	
経 動	

② 地質・地質構造 (2/2)

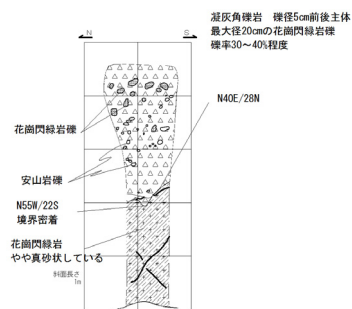
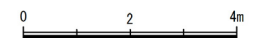
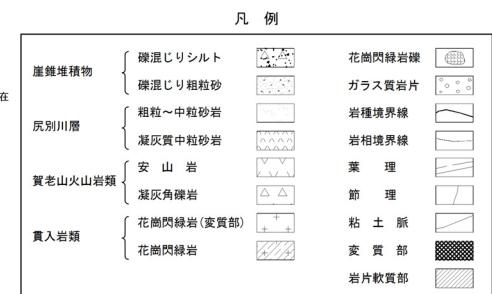
一部修正 (H27/10/9審査会合)



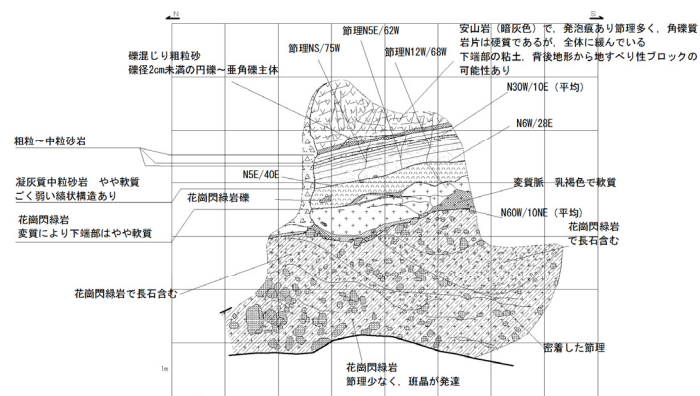
詳細位置図



No.1露頭

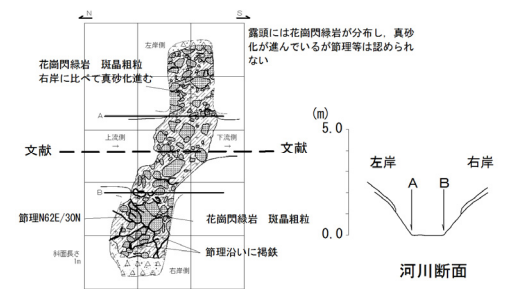


No.2露頭



No.3露頭

露頭スケッチ



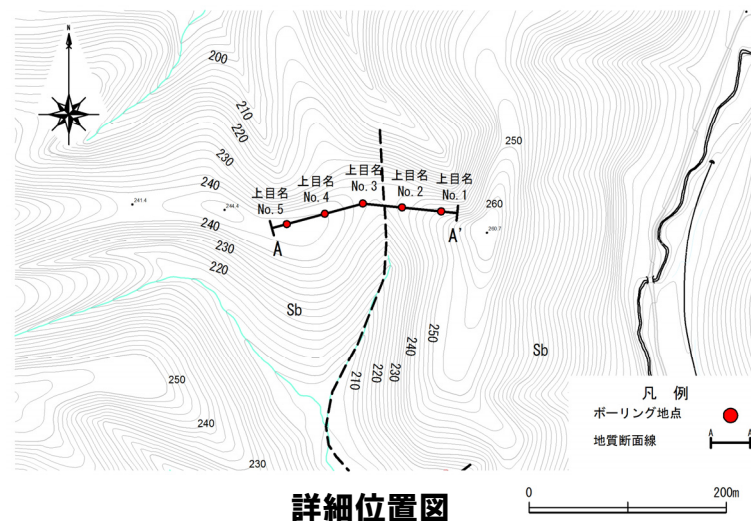
No.4露頭

河川断面

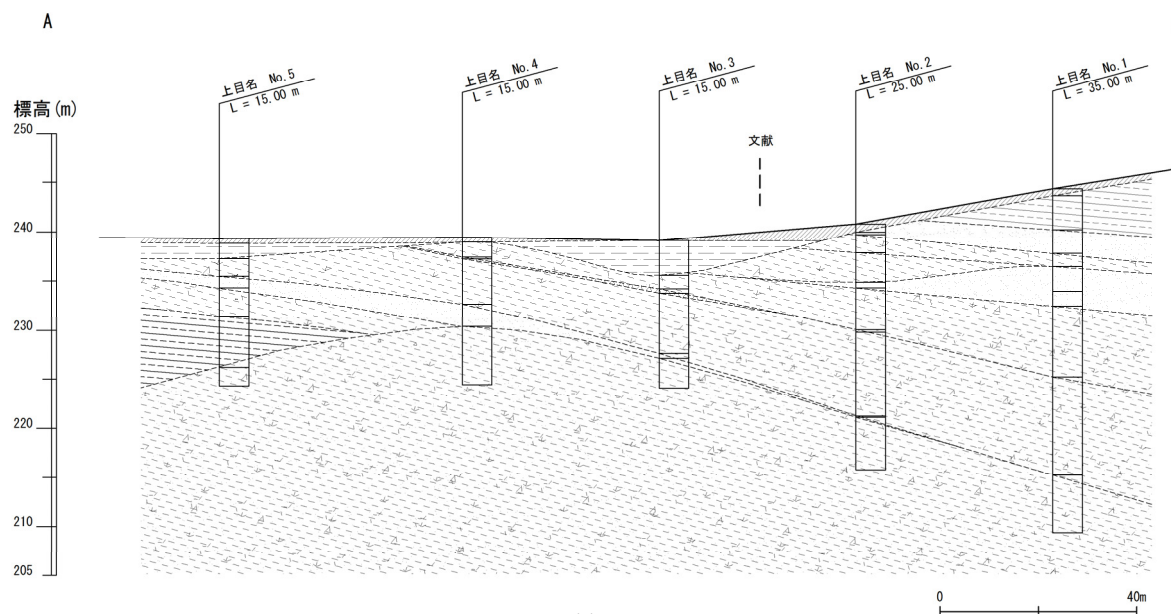
③ 上目名付近の断層北部における調査結果（ボーリング調査）

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 上目名付近の断層の北部においてボーリング調査を実施した（調査位置はP104参照）。
- 尻別川層は概ね一様に東側へ傾斜し、尻別川層内に破砕帯等の断層の存在を示唆するような構造は認められない。



詳細位置図



地質断面図

凡 例

地層名

表土	シルト	
H0段丘群相当堆積物	シルト	
	砂岩	
尻別川層	凝灰岩	
	泥岩	
	礫岩	

2. 3 上目名付近の断層

④ 評 価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

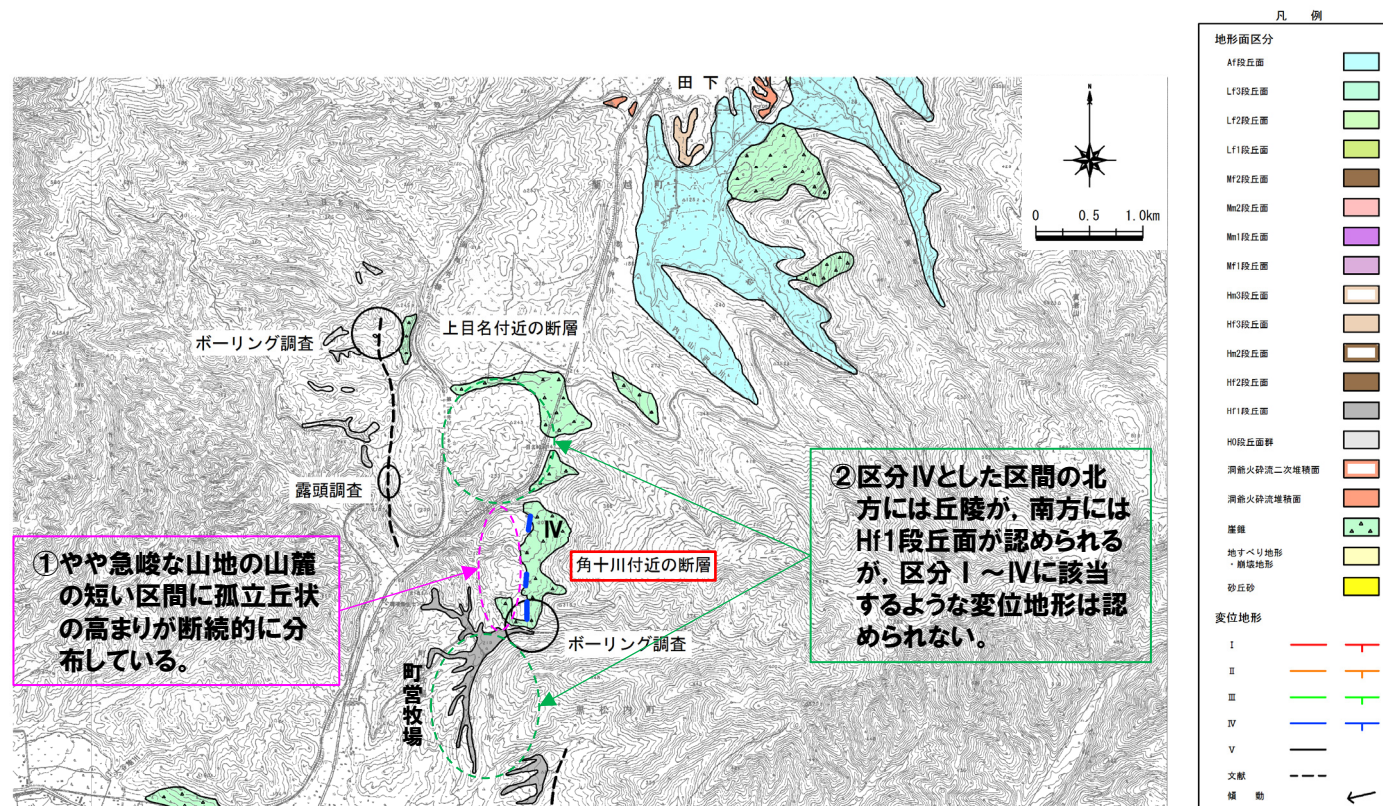
- 地形調査結果より、上目名付近の断層周辺では、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。
- 地表地質踏査及びボーリング調査結果より、上目名付近の断層付近には、地形から推定される東側隆起の断層の存在を示唆する構造は認められない。
- 上目名付近の断層の東側の丘陵状の高まりには、賀老山火山岩類の安山岩及び凝灰角礫岩が分布することから、岩質の相違によって形成された組織地形と判断される。
- これらのことより、上目名付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。

2.4 角十川付近の断層

① 地 形

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 調査地域付近は、黒松内町の町営牧場北東部の山間部であり、Hf1段丘面、崖錐等が分布している。
- やや急峻な山地の山麓の短い区間に孤立丘状の高まりが断続的に分布している。
- 区分Ⅳとした区間の北方には丘陵が、南方にはHf1段丘面が認められるが、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。



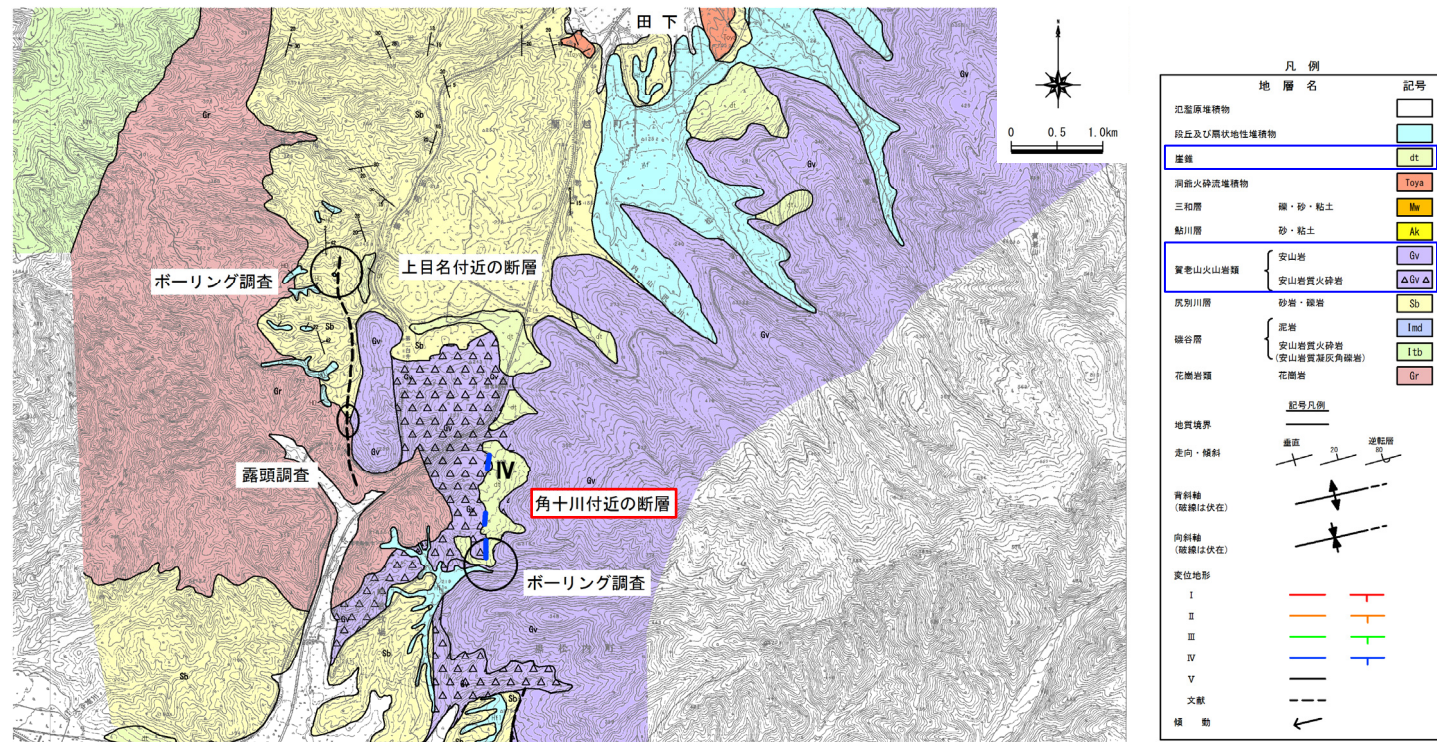
角十川付近の断層周辺の地形分類図

2.4 角十川付近の断層

② 地質・地質構造

再掲 (H27/10/9審査会合)

○角十川付近の断層周辺は、新第三系鮮新統賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び安山岩が分布しており、これを第四紀更新世の崖錐堆積物及び風成層が覆っている。



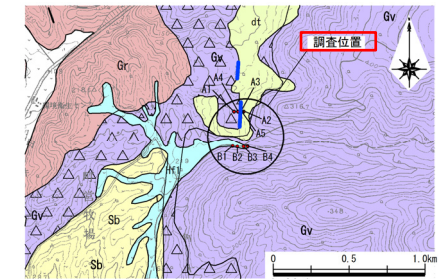
角十川付近の断層周辺の地質図

2.4 角十川付近の断層

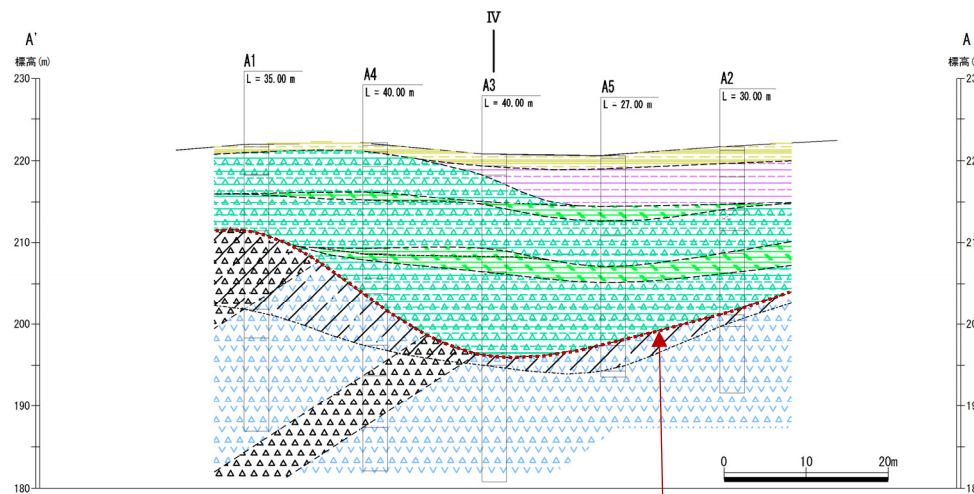
③ 角十川付近の断層中央部における調査結果（ボーリング調査）

- 角十川付近の断層の中央部を横断する約60mの区間においてボーリング調査を実施した。
- ボーリング地点は、賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び安山岩を基盤とし、これを崖錐堆積物及び風成層が覆っている。
- 基盤岩の上面の分布は、西側が高くなっているが、破碎帯等の断層の存在を示唆するような構造は認められない。

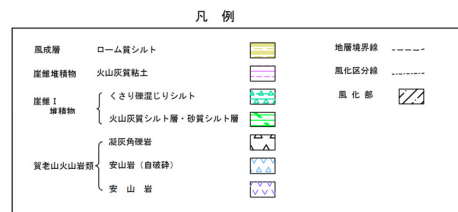
再掲 (H27/10/9審査会合)



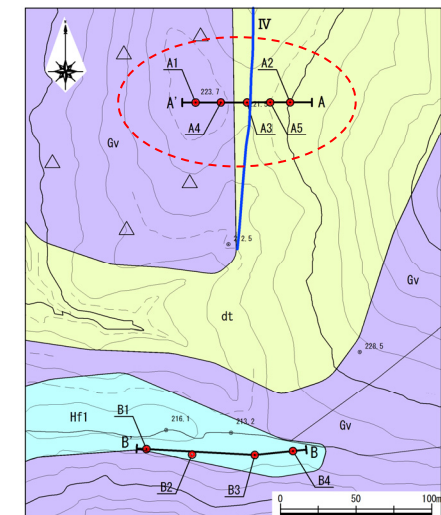
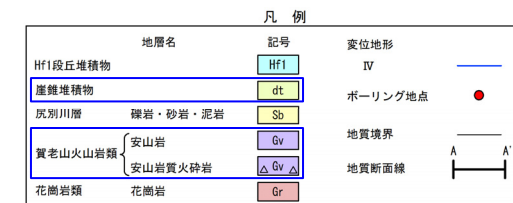
位置図



基盤岩の上面



地質断面図

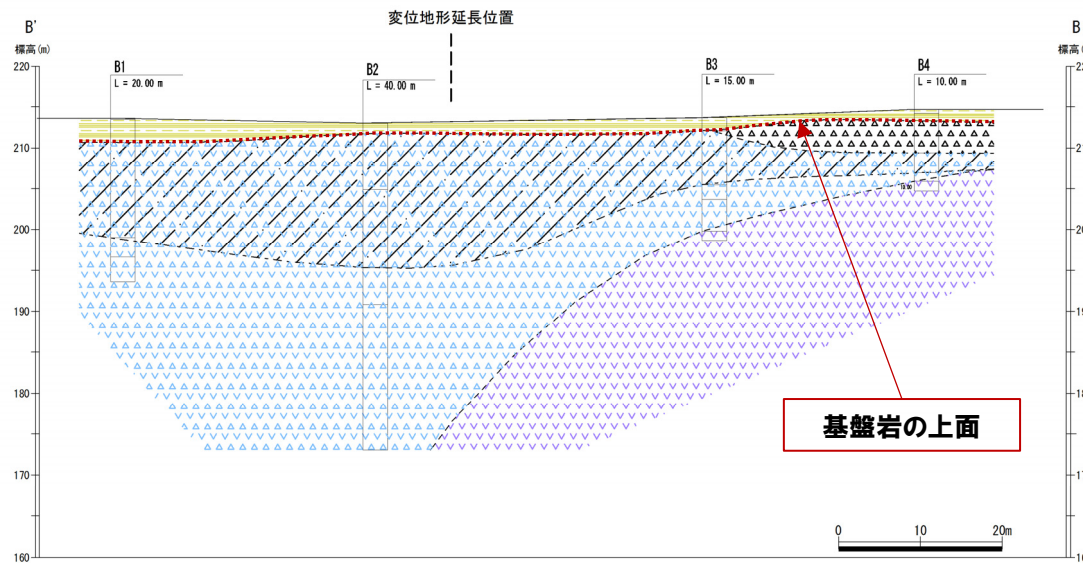


詳細位置図

2.4 角十川付近の断層

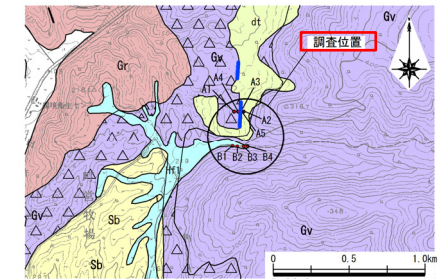
④ 角十川付近の断層南方のHf1段丘面における調査結果（ボーリング調査）

- 角十川付近の断層の南方のHf1段丘面上の約100mの区間においてボーリング調査を実施した。
- ボーリング地点は、賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び安山岩を基盤とし、これを風成層が覆っている。
- 基盤岩の上面は、変位地形の延長部を挟んで緩やかに西側に傾斜して連続している。

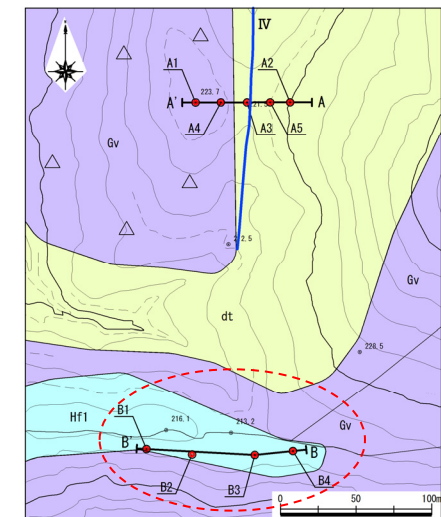
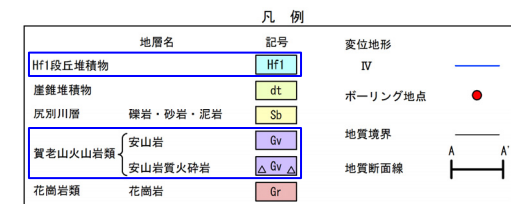


地質断面図

再掲（H27/10/9審査会合）



位置図



詳細位置図

⑤ 評 価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

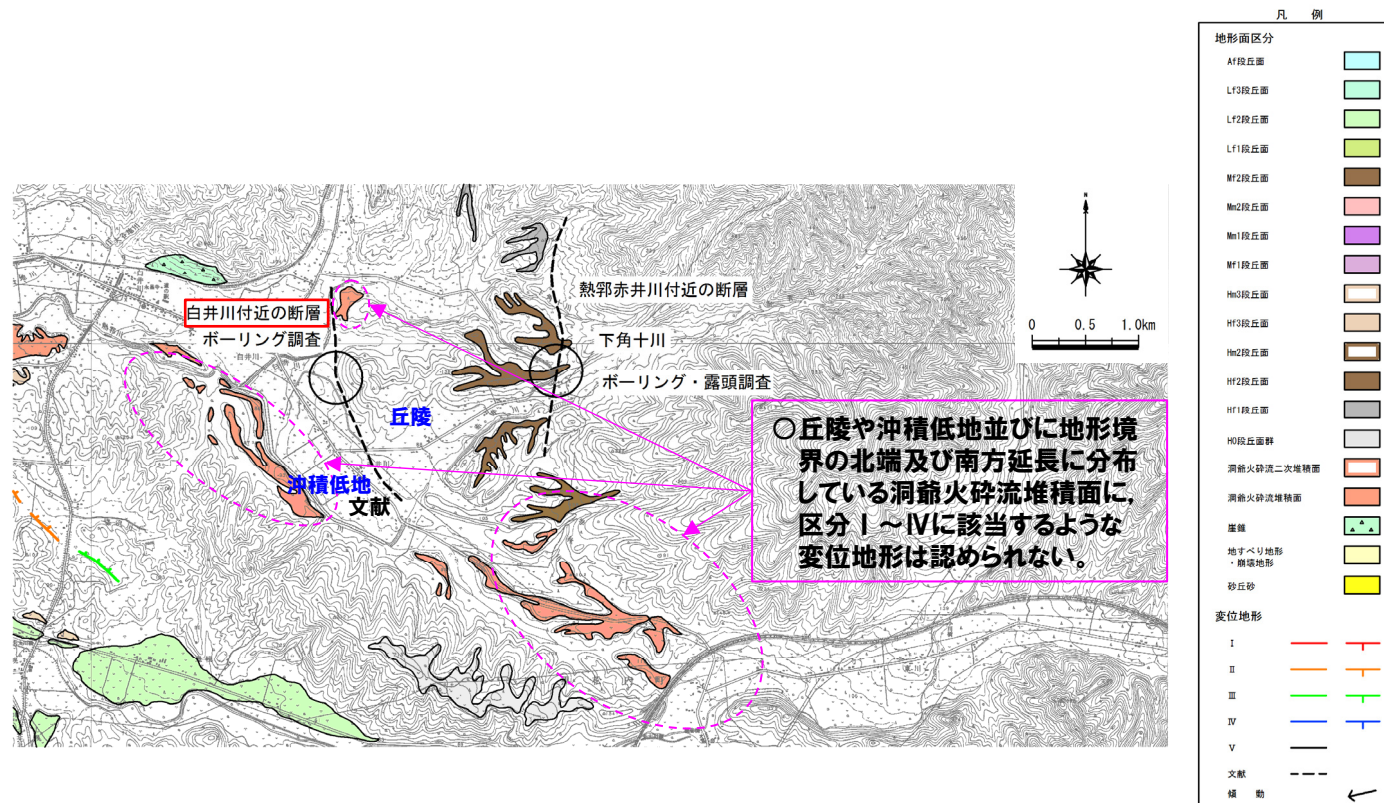
- 地形調査結果より、黒松内町の町営牧場北東部には、やや急峻な山地の山麓の短い区間に孤立丘状の高まりが断続的に分布している。
- 角十川付近の断層中央部におけるボーリング調査結果より、基盤岩の上面の分布は、西側が高くなっているが、破碎帯等の断層の存在を示唆するような構造は認められない。
- 角十川付近の断層の南方におけるボーリング調査結果より、基盤岩の上面は、変位地形の延長部を挟んで緩やかに西側に傾斜して連続している。
- これらのことより、角十川付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。

2.5 白井川付近の断層

① 地 形

再掲 (H27/10/9審査会合)

- 文献に示される断層位置は、白井川地区の東方にある丘陵と沖積低地との地形境界であり、その地形境界は長さが短く、形態も不鮮明である。
- 丘陵や沖積低地並びに地形境界の北端及び南方延長に分布している洞爺火砕流堆積面に、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。



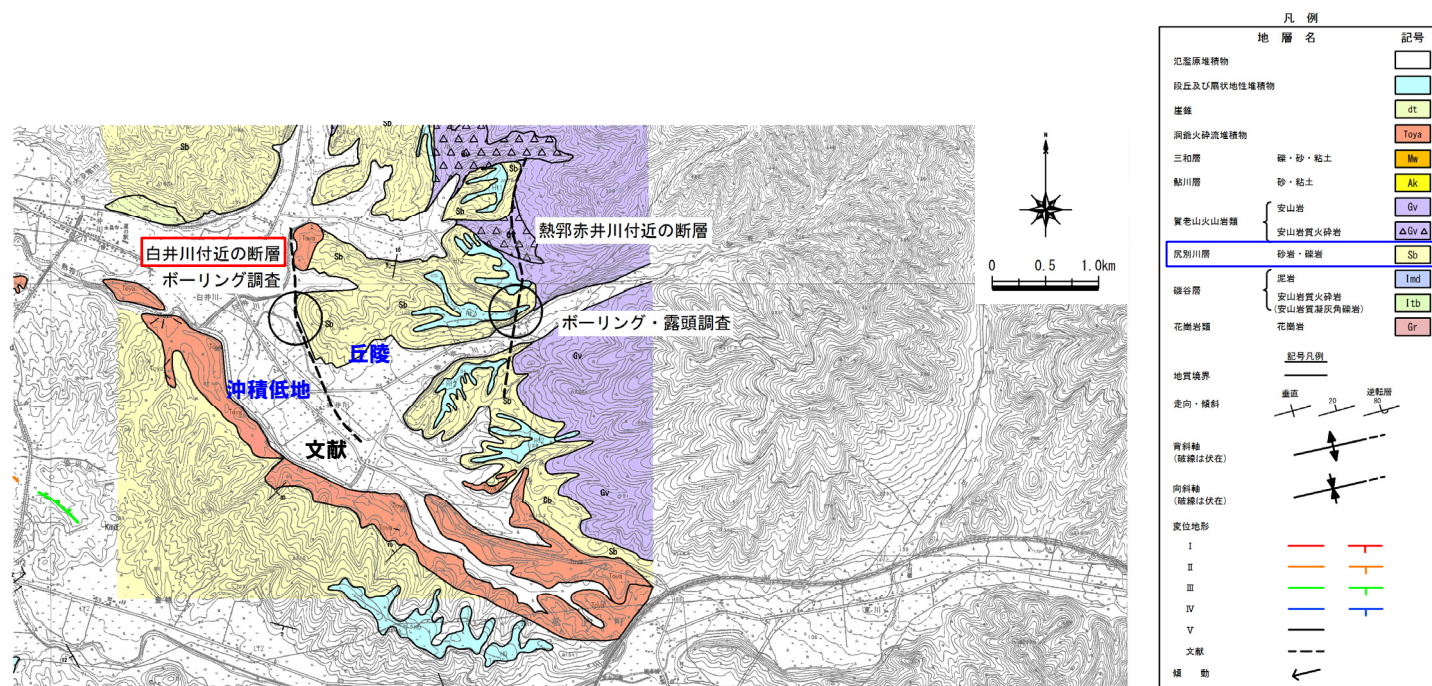
白井川付近の断層周辺の地形分類図

2.5 白井川付近の断層

② 地質・地質構造 (1/2)

再掲 (H27/10/9審査会合)

○白井川付近の断層周辺は、東側の丘陵に新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が分布しており、西側の白井川沿いに第四紀完新世の沖積層が分布している。

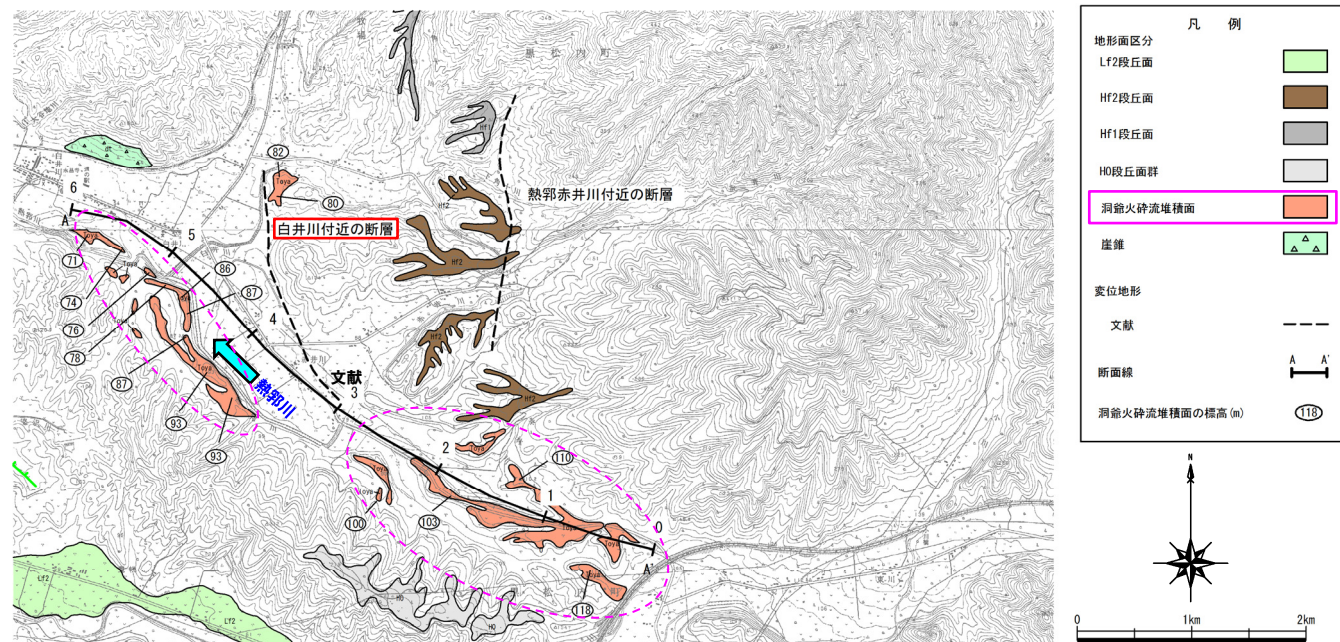


白井川付近の断層周辺の地質図

② 地質・地質構造 (2/2)

再掲 (H27/10/9審査会合)

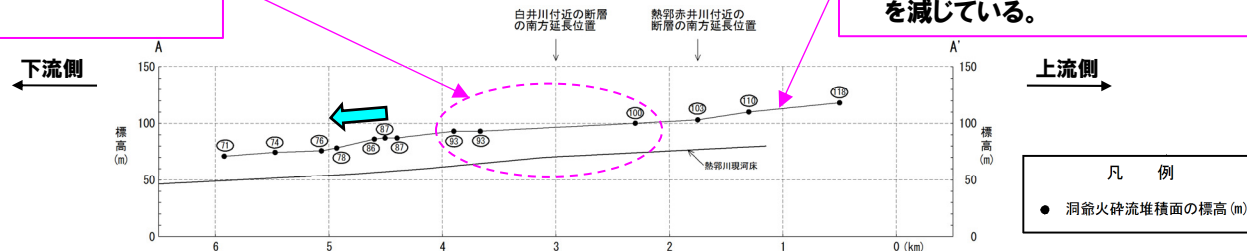
- 白井川付近の断層の北端部～南方延長には、洞爺火砕流堆積面が分布し、その分布標高は、西流する熱郭川の現河床勾配と調和的に流下方向へ高度を減じている。
- 白井川付近の断層及びその南方延長部を横断して、洞爺火砕流堆積面の分布標高に差は認められない。



○白井川付近の断層及びその南方延長部を横断して、洞爺火砕流堆積面の分布標高に差は認められない。

地形分類図

○洞爺火砕流堆積面の分布標高は、西流する熱郭川の現河床勾配と調和的に流下方向へ高度を減じている。



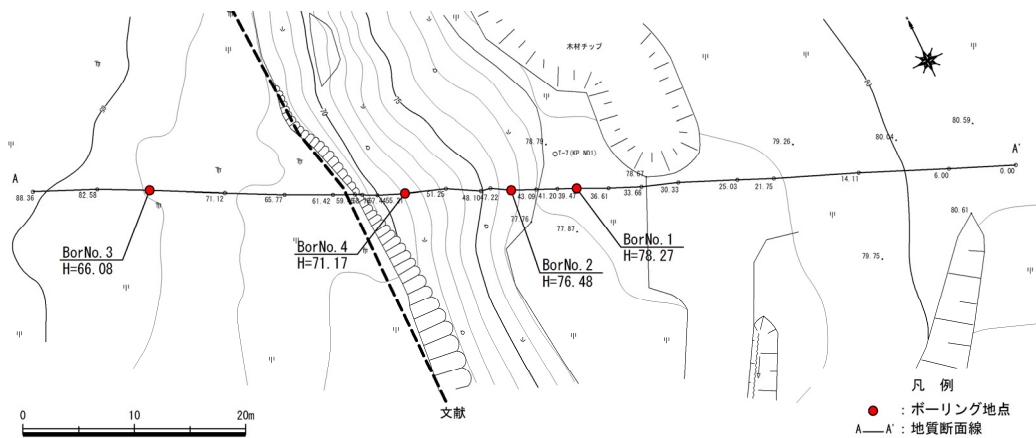
熱郭川沿いの洞爺火砕流堆積面分布標高変化図 (投影)

2.5 白井川付近の断層

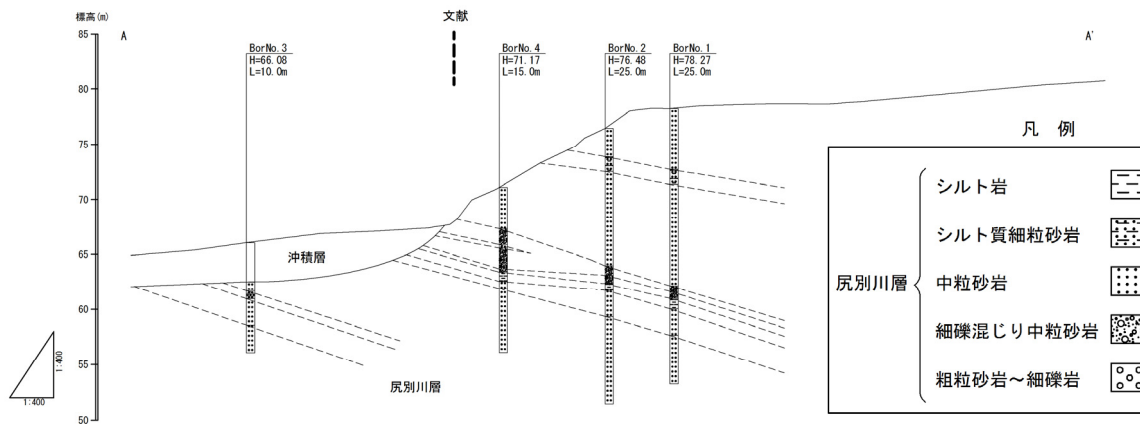
③ 白井川付近の断層中央部における調査結果（ボーリング調査）

再掲 (H27/10/9審査会合)

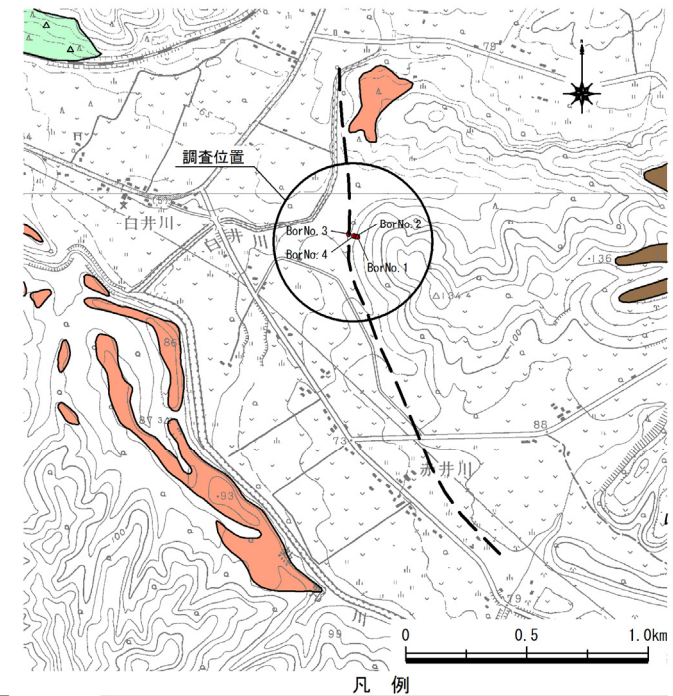
- 白井川付近の断層の中央部においてボーリング調査を実施した。
- ボーリング地点は、尻別川層の砂岩及び礫岩が分布する。
- 尻別川層の構造は、東側へ15°程度傾斜した単調な勾配で連続している。



詳細位置図



地質断面図



位置図

2.5 白井川付近の断層

④ 評 価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 地形調査結果より、白井川付近の断層周辺では、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。
- 白井川付近の断層中央部におけるボーリング調査結果より、尻別川層は東側へ15°程度の傾斜で連続し、文献で示されるような東上がりの構造は認められない。
- 白井川付近の断層の北端部～南方延長には、洞爺火砕流堆積面が分布し、その分布標高は、西流する熱郭川の現河床勾配と調和的に流下方向へ高度を減じており、白井川付近の断層及びその南方延長部を横断して、洞爺火砕流堆積面の分布標高に差は認められない。
- これらのことより、白井川付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。

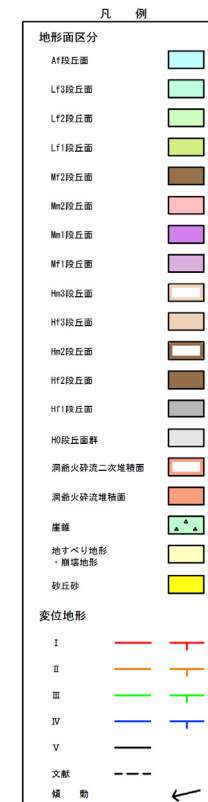
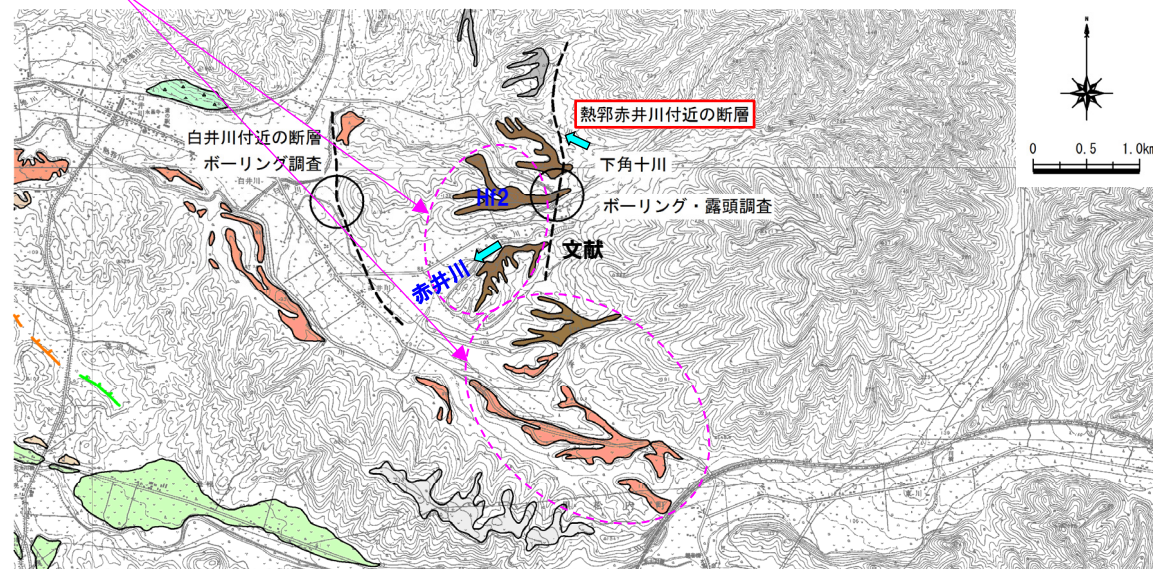
2. 6 熱郭赤井川付近の断層

① 地 形

再掲 (H27/10/9審査会合)

- 文献に示される断層位置は、下角十川付近のやや急峻な山地の山麓及び赤井川南部の山麓に鞍部が不連続に認められる。
- 文献に示される断層位置には、赤井川によって形成されたHf2段丘面が分布し、その南方延長には、Hf2段丘面や洞爺火砕流堆積面が分布するが、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。

- 赤井川によって形成されたHf2段丘面が分布し、その南方延長には、Hf2段丘面や洞爺火砕流堆積面が分布するが、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。



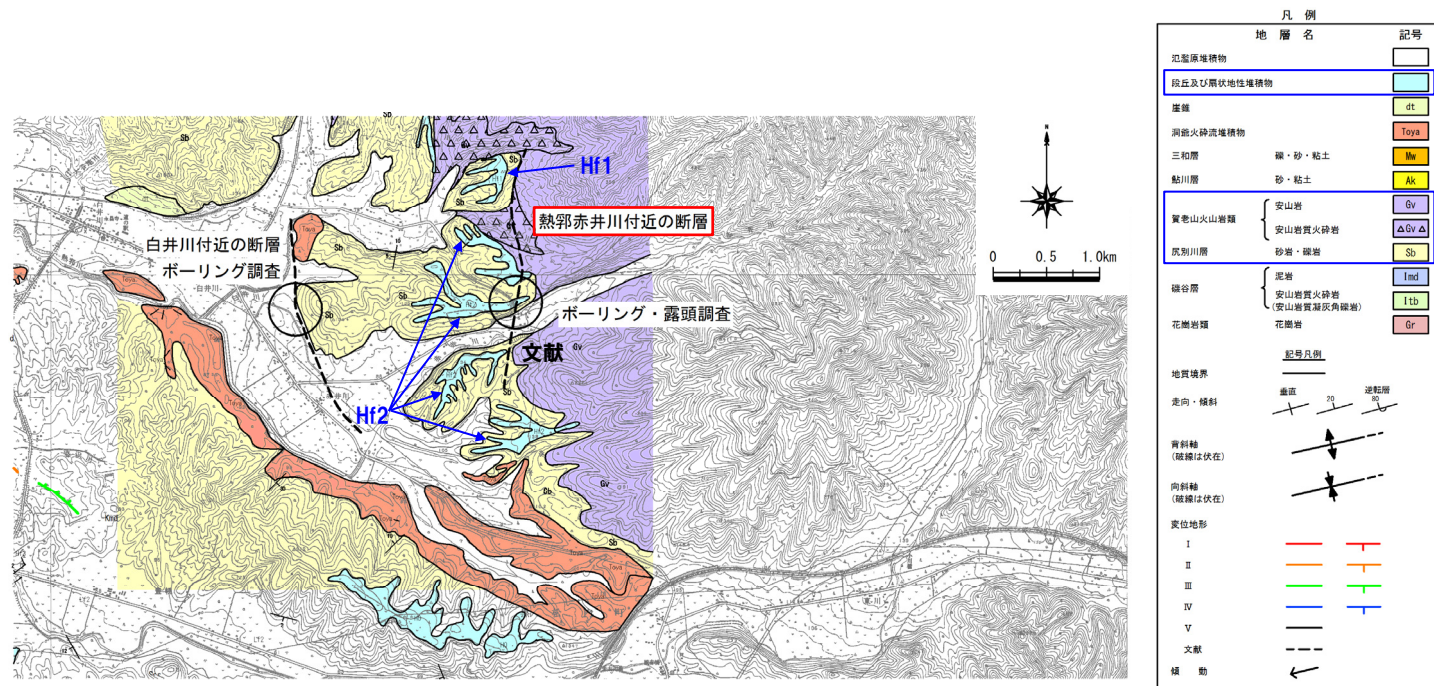
熱郭赤井川付近の断層周辺の地形分類図

2. 6 熱郭赤井川付近の断層

② 地質・地質構造

再掲 (H27/10/9審査会合)

○熱郭赤井川付近の断層周辺には、新第三系鮮新統賀老山火山岩類の凝灰角礫岩及び新第三系上部鮮新統～第四系下部更新統尻別川層の砂岩及び礫岩が分布しており、これを高位の河成段丘堆積物が覆っている。



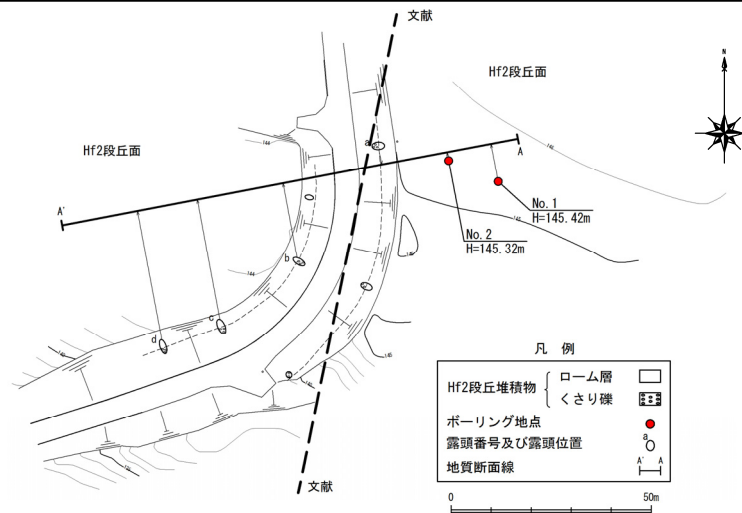
熱郭赤井川付近の断層周辺の地質図

2. 6 熱郭赤井川付近の断層

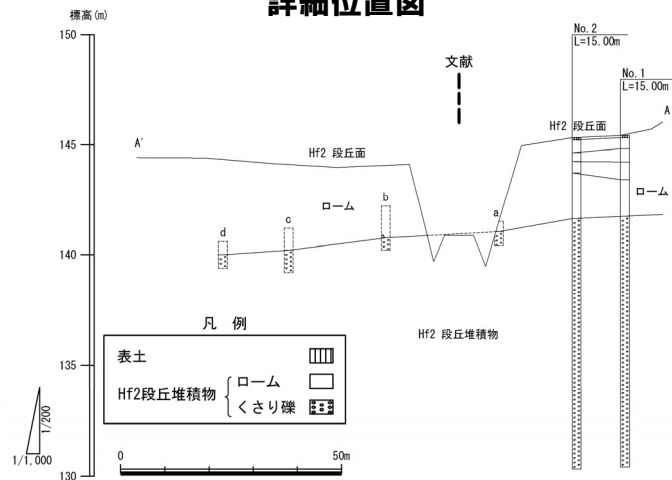
③ Hf2段丘面における調査結果（ボーリング調査）

再掲 (H27/10/9審査会合)

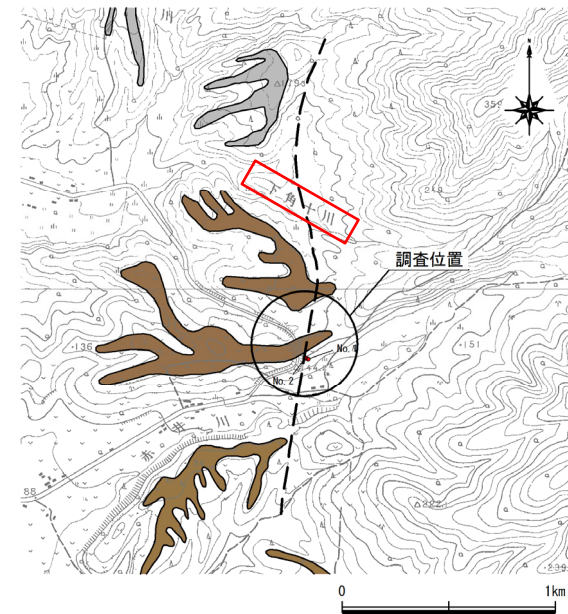
- 下角十川南方のHf2段丘面でボーリング調査を実施し、周辺の露頭調査結果と併せて地層の連続性を確認した。
- 調査位置にはHf2段丘堆積物が分布し、それをローム層が覆っている。
- 調査位置では、熱郭赤井川付近の断層を挟んで、Hf2段丘堆積物を覆うローム層の基底がほぼ水平に連続している。



詳細位置図



地質断面図



位置図

2. 6 熱郭赤井川付近の断層

④ 評 価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

- 地形調査結果より、熱郭赤井川付近の断層周辺では、区分Ⅰ～Ⅳに該当するような変位地形は認められない。
- 地表地質踏査及びボーリング調査結果より、下角十川南方では、熱郭赤井川付近の断層を挟んでHf2段丘堆積物を覆うローム層の基底がほぼ水平に連続している。
- これらのことより、熱郭赤井川付近の断層付近には、後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断される。

余白

3. 敷地前面及び周辺海域における個別断層の評価

3. 1 評価結果一覧

① 評価結果一覧(敷地前面海域)(1/4)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

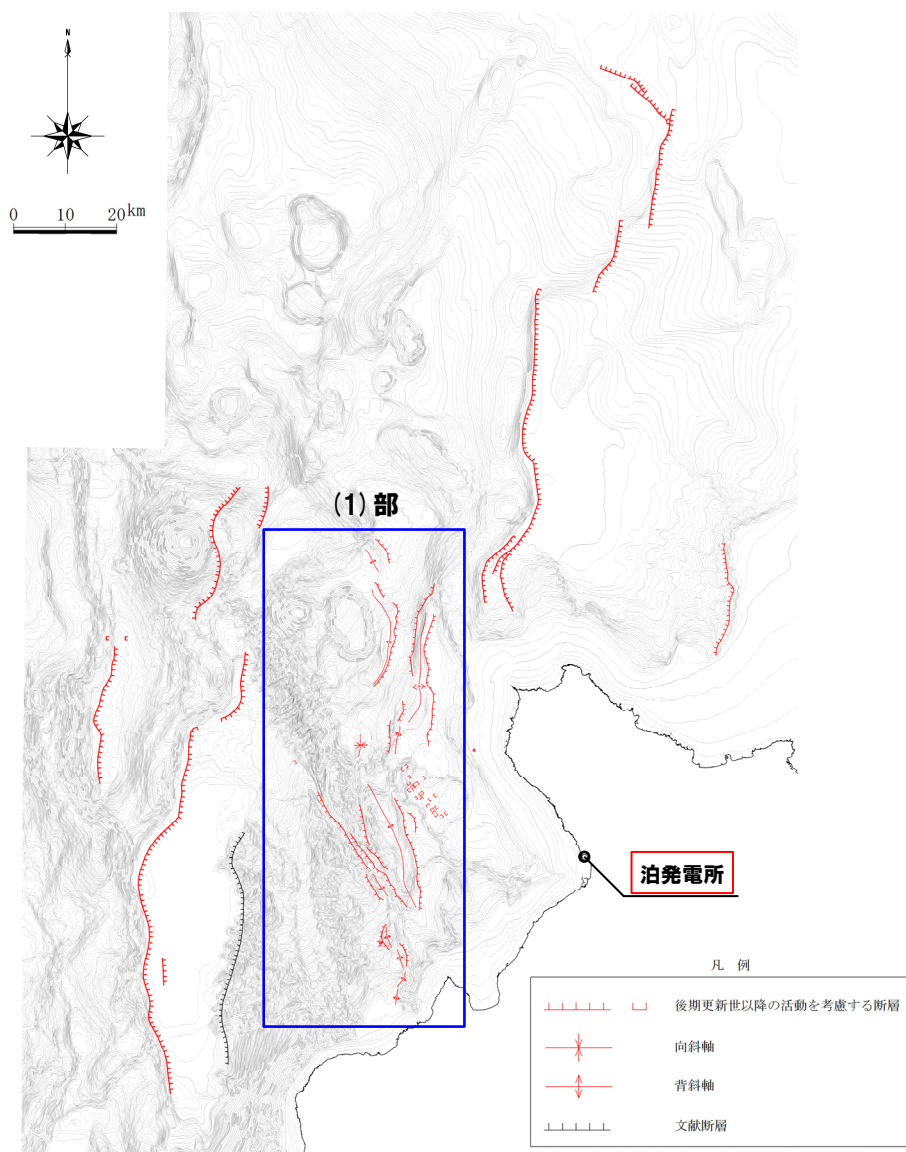
断層名		走向 ()内は相対的 落下方向)	断層運動による		総合評価	備考	断層長さ (km)
			変形又は 変位が認められる 最上位層	変形又は変位が 認められない地層			
神 威 海 脚 西 側 の 断 層 (詳細は本編資料P98～P102参照)	F _D -2	NNE-SSW～N-S (ESE～E)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○両断層で背斜構造の規模が異なるが、互いに走向及び相対的落下方向が同じであり、連続することから、これらの断層を「神威海脚西側の断層」と呼称し、一連として後期更新世以降の活動を考慮する。	約31.5km
	F _S -11		Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。		
F _D -1 (詳細は本編資料P103～P108参照)		NE-SW～NNE-SSW (NW～WNW)	Ⅲ層	なし	○Ⅲ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であり、さらにⅡ層が分布しないことから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○F _D -1断層と岩内堆北方の断層は、連続して認められないものの、共に神威海脚西側のN-S方向の背斜構造との関連が推定されることから、これらの断層を一括して後期更新世以降の活動を考慮する。	約39km
岩 内 堆 北 方 の 断 層 (詳細は本編資料P103～P108参照)	F _S -8	N-S (W)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であり、一部でⅡ層が分布していないことから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○両断層は、それぞれ傾斜方向が異なるものの、神威海脚西側の背斜構造の西翼に互いに近接して認められ、その背斜構造との関連が考慮されることから、これらの断層を「岩内堆北方の断層」と呼称し、一括して後期更新世以降の活動を考慮する。	
	F _S -9	N-S (E)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であり、一部でⅡ層が分布していないことから、 後期更新世以降の活動を考慮する。		
神恵内堆の断層群 (詳細は本編資料P109～P111参照)		不明 (様々)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層の変位・変形が小さく、下位のⅦ層内の変位量も小さいと推定されることから、後期更新世以降の活動が継続的に生じた可能性は低く、敷地に与える影響は小さいものと判断されるが、安全評価上、 後期更新世以降の活動を考慮する。	—	連続性に乏しい

敷地前面海域では、文献断層を含む全範囲を網羅するように海上音波探査測線を配置し、震源として考慮する活断層評価を実施しており、表には震源として考慮するものを記載している。

3. 1 評価結果一覧

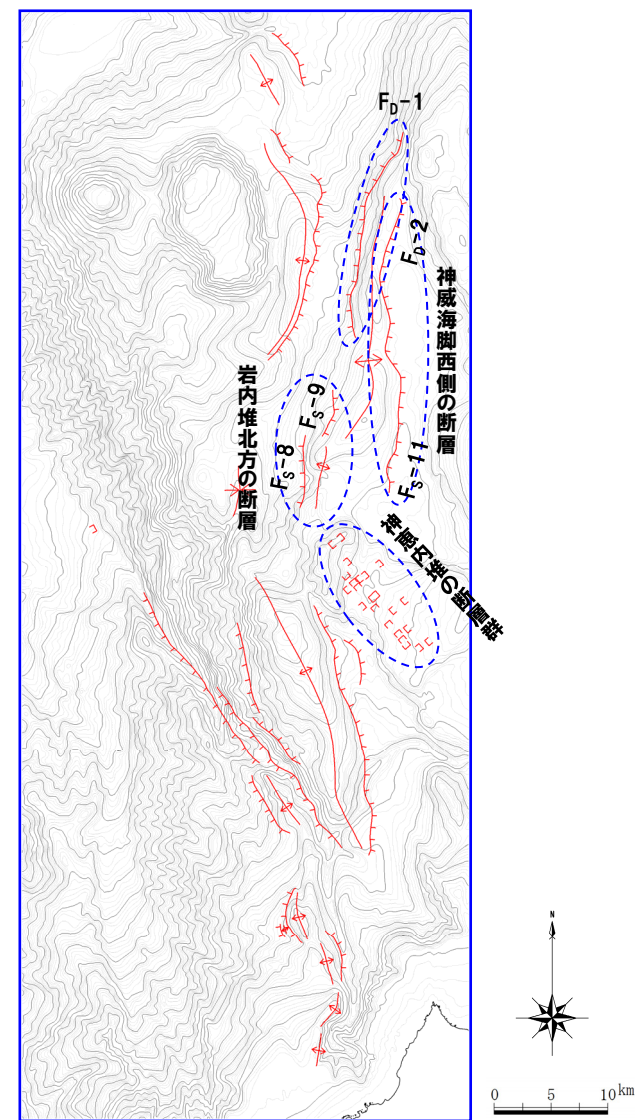
① 評価結果一覧(敷地前面海域) (2/4)

一部修正 (H27/10/9審査会合)



海域の活断層位置図

(1) 部拡大



敷地前面海域の活断層位置図

3. 1 評価結果一覧

① 評価結果一覧(敷地前面海域)(3/4)

一部修正(H27/10/9審査会合)

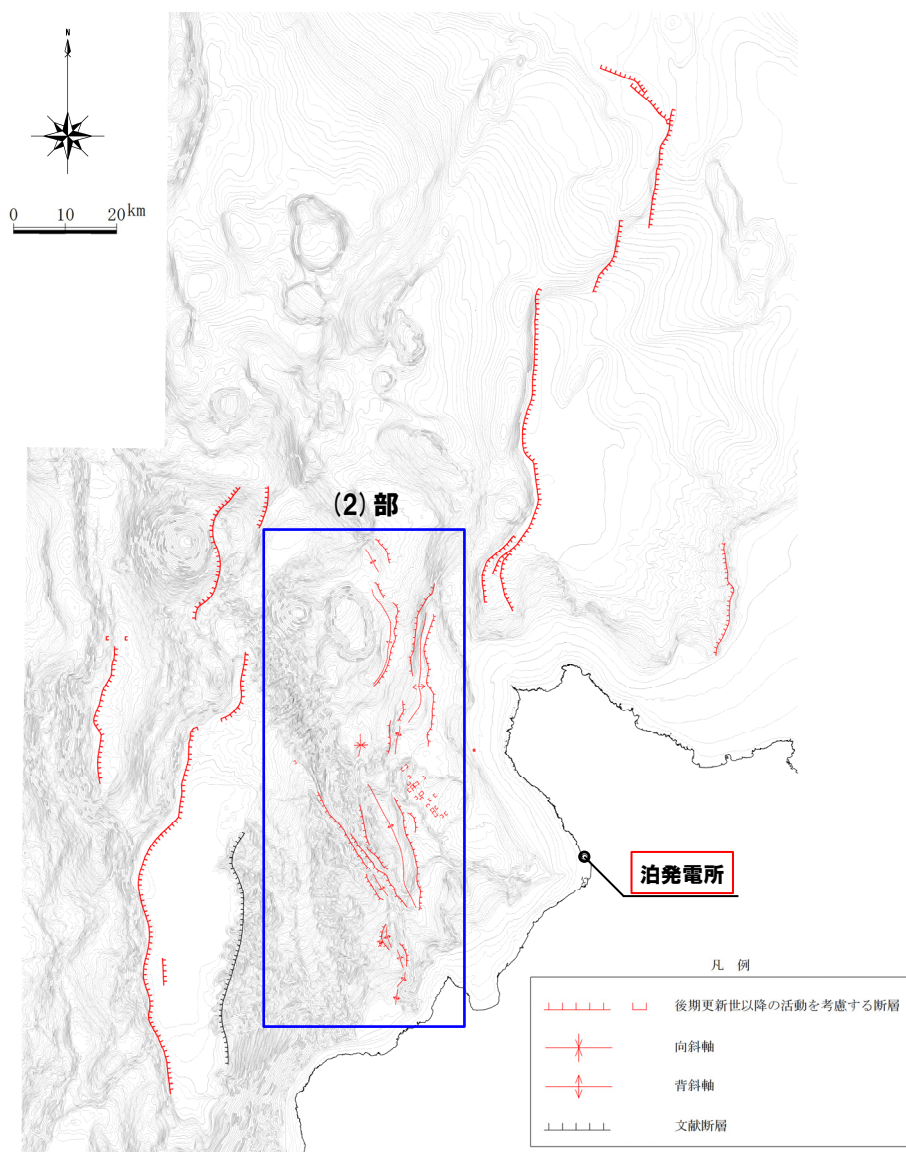
断層名		走向 ()内は相対的 落下方向)	断層運動による		総合評価	備考	断層長さ (km)
			変形又は 変位が認められる 最上位層	変形又は変位が 認められない地層			
F _s -10	F _s -10	NNE-SSW～N-S (ESE～E)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○f1断層は、F _s -10断層と地形的な連続性が途切れるものの、F _s -10断層北方延長に認められ、相対的落下方向がほぼ同じであること、並びにそれぞれの距離が近いことから、F _s -10断層と一連として後期更新世以降の活動を考慮する。	約98km
	f1	NW-SE (NE)	Ⅲ層下部	なし	○Ⅳ層及びⅢ層下部に累積的な変形が認められ、Ⅱ層では層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。		
岩内堆東撓曲		NNW-SSE～ NNE-SSW (ENE～ESE)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○F _s -10断層及び岩内堆東撓曲は、大局的にN-S走向で西側隆起の構造と推定される。 ○F _s -10断層と岩内堆東撓曲の間には、長さの短い連続しない向斜軸が認められる。 ○岩内堆東撓曲の南西方には、大局的に西傾斜の伏在断層が推定される岩内堆南方背斜が分布する。 ○これらの構造については、連続しないものの、ほぼ同走向で西傾斜の構造が断続的に分布すること等から、安全評価上、連動の対象として評価する。	
岩内堆南方背斜 (詳細は本編資料 P113～P138参照)		N-S (E※)	Ⅱ層	なし	○Ⅳ層に累積的な変形を与え、Ⅲ層及びⅡ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。		
F _s -12 (詳細は本編資料P140～ P143参照)		NNW-SSE～N-S (E～ENE)	Ⅱ層	なし	○Ⅱ層に変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	—	約6.7km
寿都 断層 海底谷の (詳細は本編資料 P144～P147参照)	F _s -15	NW-SE (NE)	Ⅲ層	なし	○Ⅲ層以下の地層に変位若しくは変形が認められるか、又は層理が不明瞭であり、さらにⅡ層が分布していないこと等から、 後期更新世以降の活動を考慮する。	○これらの断層は、位置が近接し、走向がほぼ同じであることから、安全評価上、これらの断層を「寿都海底谷の断層」と呼称し、一括して後期更新世以降の活動を考慮する。	約42km
	F _s -16	NW-SE (SW)	Ⅱ層				
	F _s -17	NW-SE (SW)	Ⅲ層				
	F _s -18	NW-SE (SW)	Ⅲ層				
	F _s -19	NW-SE (WSW)	Ⅲ層				

※岩内堆南方背斜には大局的に西傾斜の伏在断層が推定される。

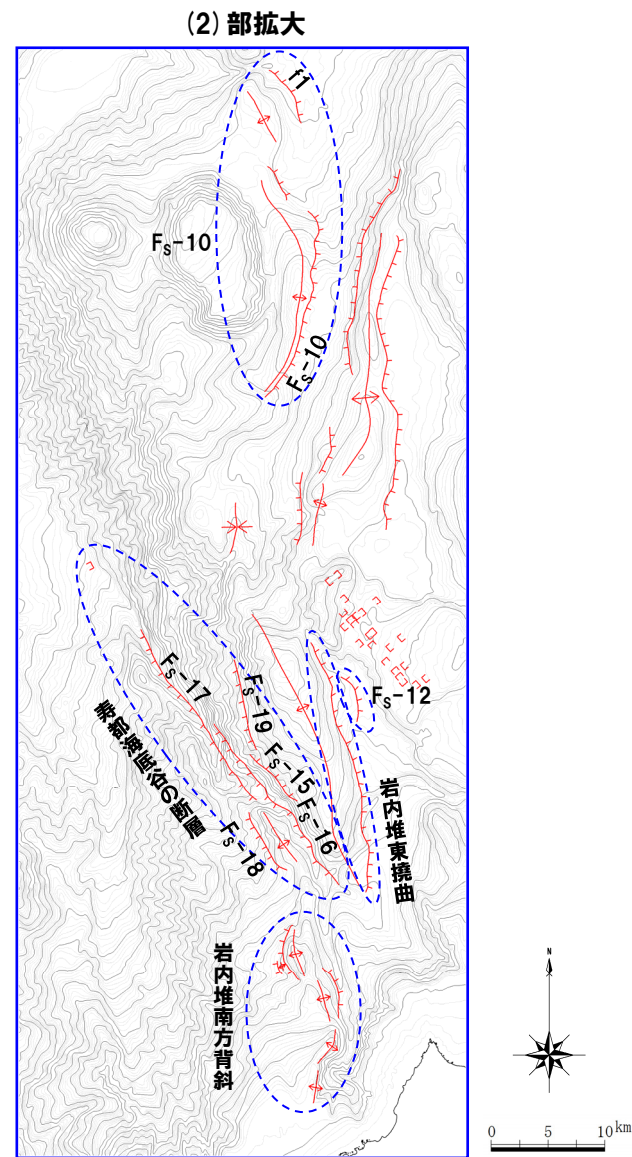
敷地前面海域では、文献断層を含む全範囲を網羅するように海上音波探査測線を配置し、震源として考慮する活断層評価を実施しており、表には震源として考慮するものを記載している。

① 評価結果一覧(敷地前面海域) (4/4)

一部修正 (H27/10/9審査会合)



海域の活断層位置図



敷地前面海域の活断層位置図

3. 1 評価結果一覧

② 評価結果一覧 (敷地周辺海域) (1/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

断層名		文献に示されている性状		海上音波探査記録の解析結果		総合評価	備考	断層長さ (km)
		掲載文献 (() 内は長さ)	走向 (() 内は相対 的落下方向)	地形的特徴	変形又は 変位が認めら れる最上位層	走向 (() 内は相対 的落下方向)		
留萌西側海域の断層	F _A -1	①海上保安庁水路部「20万分の1海底地質構造図」(約27, 21, 15km) ②地質調査所「100万分の1広域海底地質図」(約35, 33km) ③活断層研究会「[新編]日本の活断層」(約98km) ④地質調査所「日本地質アトラス(第2版)」(約66km) ⑤徳山ほか(2001)「日本周辺海域中新世最末期以降の構造発達史」(約68km)	N-S~NE-SW (E~SE)	○南武蔵堆から神威海嶺へ連なる海底地形の高まりと、その東側の天売舟状海盆から石狩海盆の平坦部との地形変換点付近。	I~II層	NW-SE~N-S (NE~E)	○I~II層に変位若しくは変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	約48km
	F _A -1' (詳細は本編資料P156~P162参照)				I~II層	N-S (E)	○I~II層に変位若しくは変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	
	F _A -2 (詳細は本編資料P163~P166参照)				II層下部	N-S~NE-SW (E~SE)	○II層下部に変位若しくは変形が認められるか、又は層厚が薄いこと等により層理が不明瞭であることから、 後期更新世以降の活動を考慮する。	約65km

※ 敷地周辺海域では、主要な文献断層を対象に、震源として考慮する活断層評価を実施している。

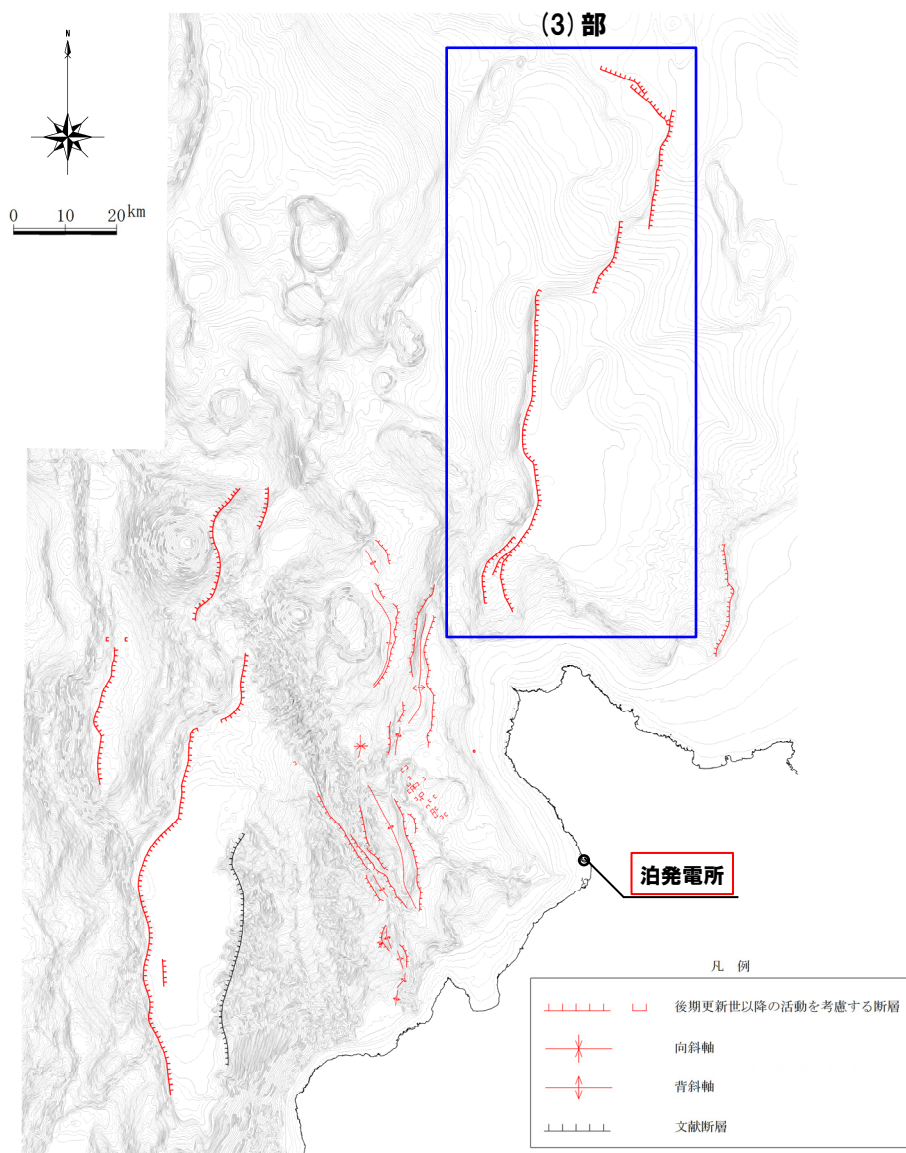
□ : 震源として考慮する活断層

■ : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

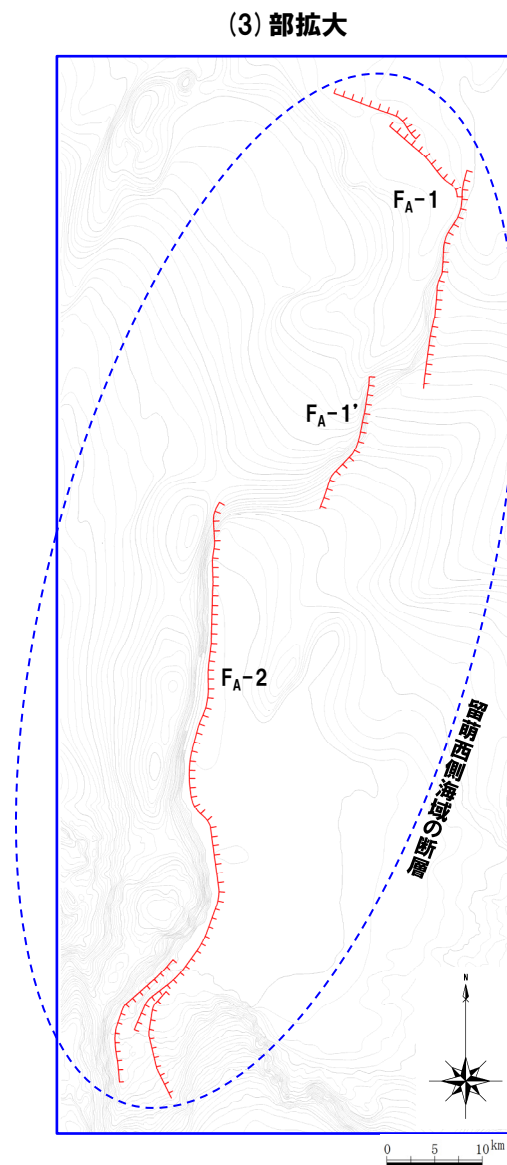
3. 1 評価結果一覧

② 評価結果一覧(敷地周辺海域) (2/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)



海域の活断層位置図



敷地周辺海域の活断層位置図

3. 1 評価結果一覧

② 評価結果一覧 (敷地周辺海域) (3/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

断層名	文献に示されている性状			海上音波探査記録の解析結果		総合評価	備考	断層長さ (km)
	掲載文献 () 内は長さ	走向 () 内は相対 的落下方向	地形的特徴	変形又は 変位が認めら れる最上層	走向 () 内は相対 的落下方向			
神威岬西側海域の断層	後志海山 東方の 断層	⑥岡村 (2023)「積丹半島 付近海底地質図」(約 34,11km)	概ねN-S	○後志海山の東側 に位置する地形 の高まりの西側及 び東側。 ・地形の高まりの西側 のものを「後志海山 東方の断層1」、東側 のものを「後志海山 東方の断層2」とそれ ぞれ呼称。	Q層 (第四紀層)	概ねN-S (W)	○第四紀以降に活動し たと考えられること及 び当社は当該断層を 評価するための海上 音波探査記録を有し ておらず、後期更新世 以降の活動について 評価できないことから、 後期更新世以降の活 動を考慮する。	○F _B -2断層と後志海山東方 の断層には、断層の傾斜 方向が異なること、断層の 位置する地形が異なること、 重力異常との対応関係が 異なることといった相違点 等が認められるが、これら の断層は、いずれも走向が 概ねN-S走向であることに 加え、当社は、後志海山東 方の断層を評価するための 音波探査記録を有してい ないことを踏まえると、これら の断層の連動の可能性は 否定できないことから、安 全評価上、連動の対象とし て評価する。
	F _B -1	①海上保安庁水路部「20 万分の1海底地質構造 図」(約7, 9, 18, 3km) ②地質調査所「100万分の 1広域海底地質図」(約 45km) ③活断層研究会「[新編] 日本の活断層」(約38, 30, 18, 17km) ④地質調査所「日本地質 アトラス (第2版)」(約52, 89, 64km) ⑤徳山ほか (2001)「日本 周辺海域中新世最末期 以降の構造発達史」(約 49, 62km)	N-S～NE-SW (E～SE)	○南後志海丘及び 奥尻海嶺の海底 地形の高まりと、 その東側の後志 舟状海盆の平坦 部との地形変換 点付近。	I～II層	N-S～NE-SW (E～SE)	○I～II層に変位又は 変形を与えていると判 断されることから、 後 期更新世以降の活動 を考慮する。	約124km
	F _B -2 (詳細は本編資 料P167～ P181参照)				I～II層下部	N-S (E)	○I～II層下部に変位 又は変形を与えている と判断されることから、 後期更新世以降の活 動を考慮する。	

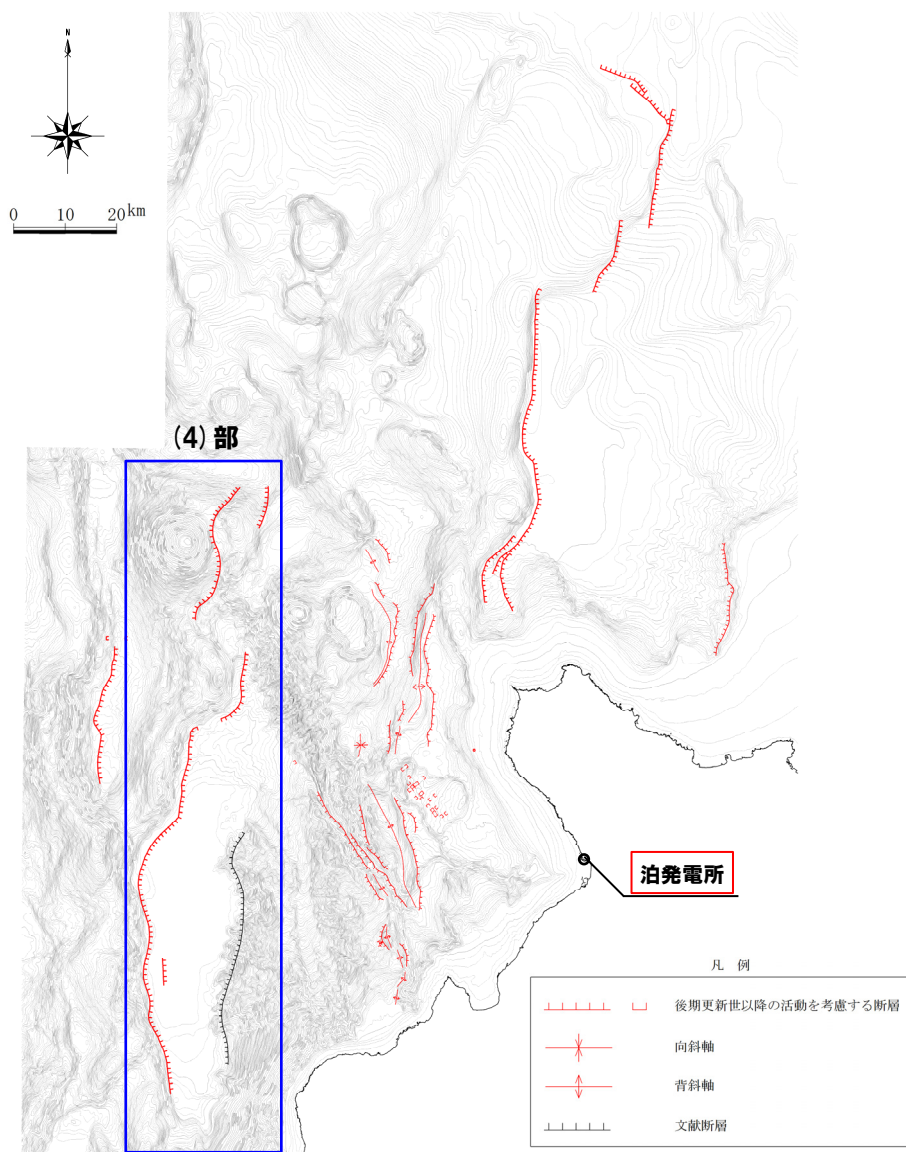
※ 敷地周辺海域では、主要な文献断層を対象に、震源として考慮する活断層評価を実施している。

□ : 震源として考慮する活断層

■ : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

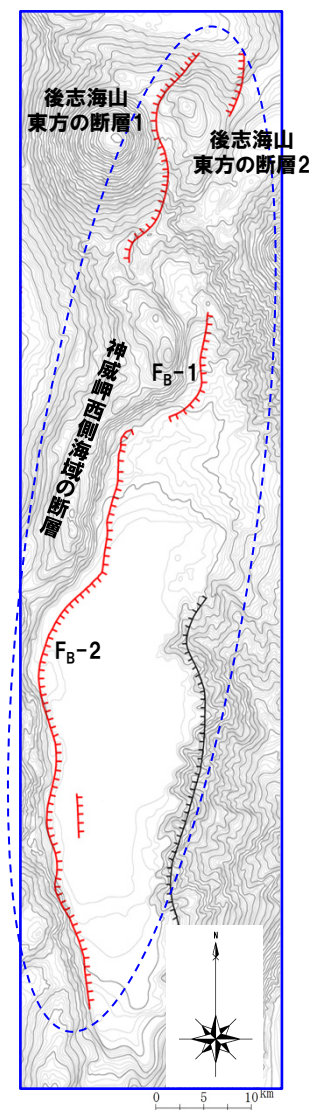
② 評価結果一覧(敷地周辺海域) (4/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)



海域の活断層位置図

(4) 部拡大



敷地周辺海域の活断層位置図

3. 1 評価結果一覧

② 評価結果一覧(敷地周辺海域)(5/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)

断層名		文献に示されている性状			海上音波探査記録の解析結果		総合評価	備考	断層長さ (km)
		掲載文献 (() 内は長さ)	走向 (() 内は相対 的落下方向)	地形的特徴	変形又は 変位が認めら れる最上位層	走向 (() 内は相対 的落下方向)			
弁慶岬 西側海域の断層 (詳細はP134～ P136参照)		③活断層研究会「〔新編〕 日本の活断層」(約 47km)	N-S (W)	○茂津多海脚の海 底地形の高まりと、 その西側の後志 舟状海盆の平坦 部との地形変換 点付近。	なし	—	○文献指摘位置では、Ⅴ層又はⅣ層にⅠ ～Ⅱ層及びⅢ層が、約15°以下の傾 斜角をもってアバットしており、変位・変 形は認められない。	—	—
積丹岬 西側海域の断層	F _B -3 (詳細は本編 資料P182～ P185参照)	②地質調査所「100万分 の1広域海底地質図」 (約27, 55km) ③活断層研究会「〔新編〕 日本の活断層」(約 25km) ④地質調査所「日本地質 アトラス(第2版)」(約 64km) ⑤徳山ほか(2001)「日本 周辺海域中新世最末期 以降の構造発達史」(約 89km)	N-S (E)	○奥尻海嶺の海底 地形の高まりと、 その東側の堆積 盆の平坦部との 地形変換点付近。	Ⅰ～Ⅱ層	N-S (E)	○Ⅰ～Ⅱ層に変形を与えていると判断さ れる。 ○F _B -3断層の北方には、Ⅴ層の上位層 に断層運動に伴うものである可能性を 否定できない変形が認められる。 ○安全評価上、これらを一連のものとして 後期更新世以降の活動を考慮する。	—	約45km
余市北側断層	F _C -1 (詳細は本編 資料P186～ P189参照)	③活断層研究会「〔新編〕 日本の活断層」(約 23km)	N-S (W)	○石狩湾の大陸棚 縁辺部。	ほとんどの区間 において、第四 系中部更新統 以上の地層が 欠如している か、又は層厚 が薄いこと等 により層理が 不明瞭。	N-S (W)	○他機関(海上保安庁水路部、地質調査 所等)の音波探査記録を用いて解析を 行った結果、文献に示される区間にF _C - 1断層が推定される。 ○ほとんどの区間において、第四系中部 更新統以上の地層が欠如しているか、 又は層厚が薄いこと等により層理が不 明瞭であることから、 後期更新世以降 の活動を考慮する。	—	約27km

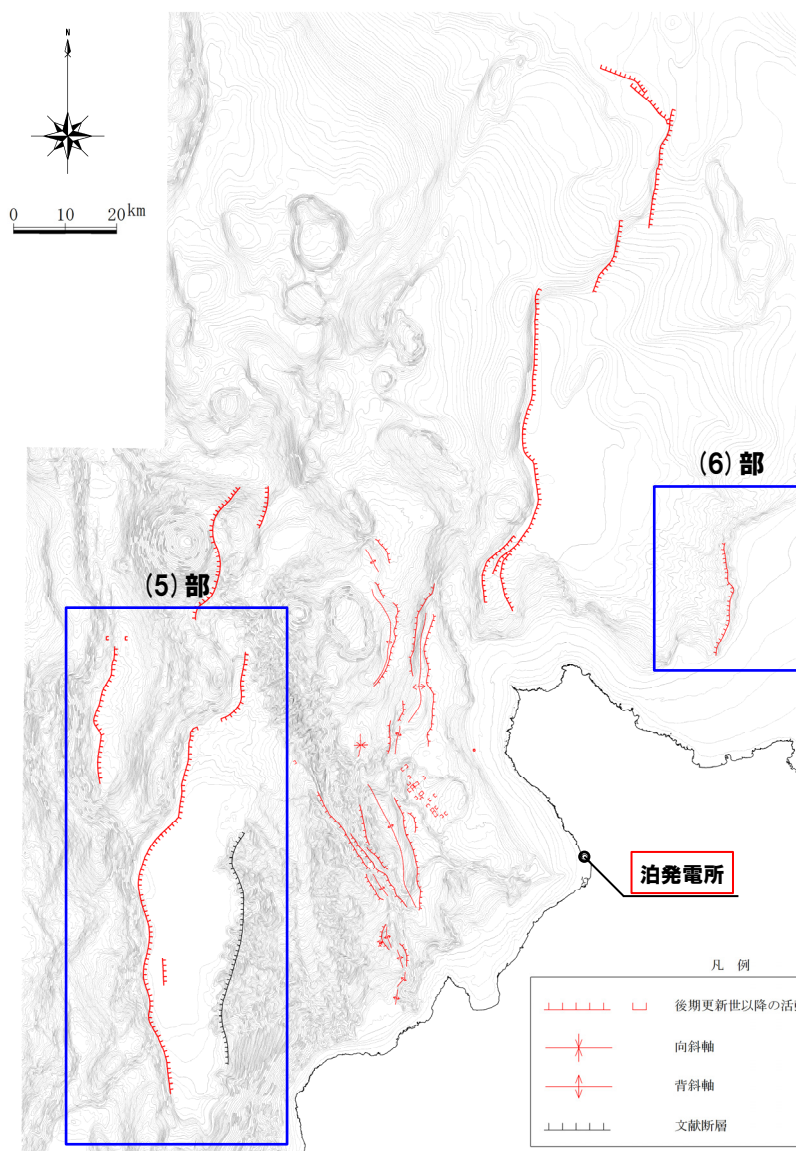
※ 敷地周辺海域では、主要な文献断層を対象に、震源として考慮する活断層評価を実施している。

□ : 震源として考慮する活断層

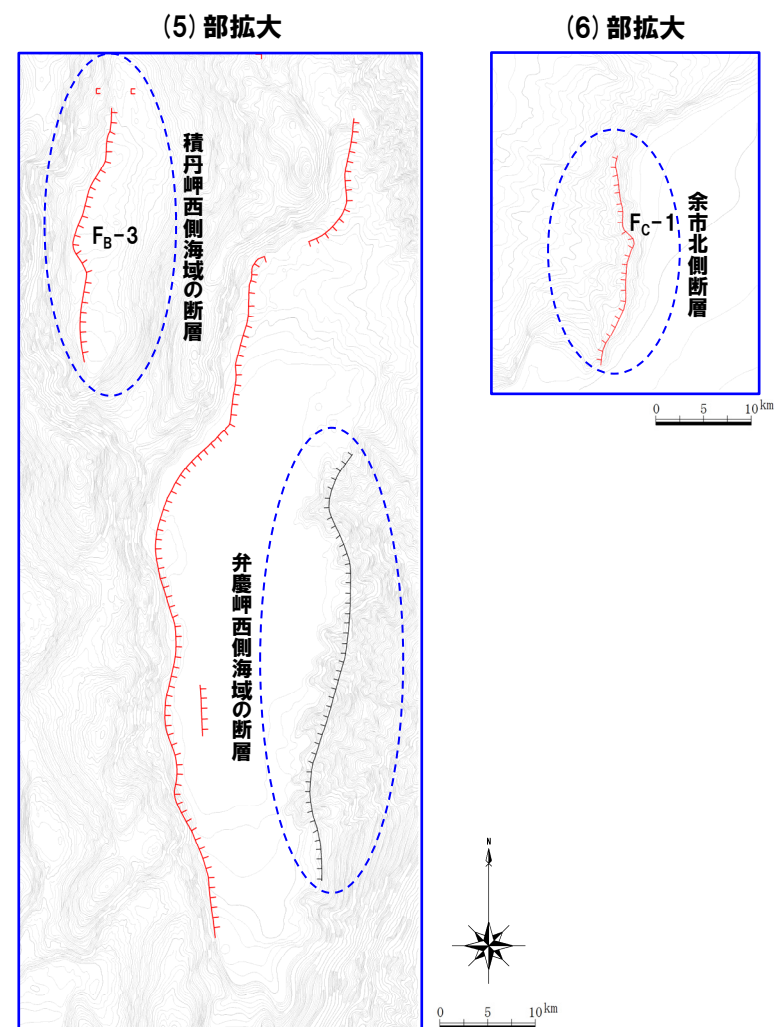
■ : 後期更新世以降の活動を考慮する断層は認められないと判断されるもの

② 評価結果一覧(敷地周辺海域) (6/6)

一部修正 (H27/10/9審査会合)



海域の活断層位置図



敷地周辺海域の活断層位置図

① 弁慶岬西側海域の断層の評価

一部修正 (H27/10/9審査会合)

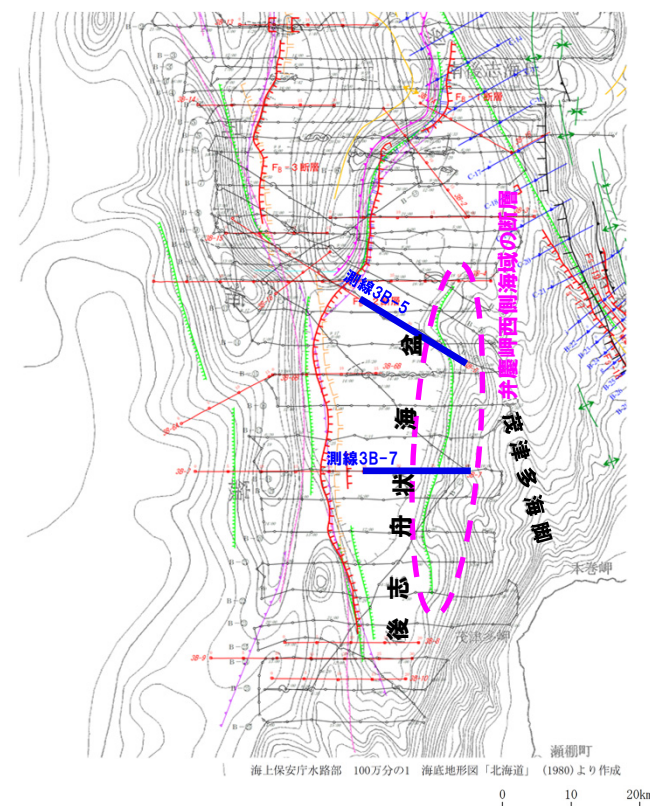
- 弁慶岬西側海域の断層は、茂津多(もった)海脚の海底地形の高まりとその西側の後志舟状海盆の平坦部との地形変換点付近に示されている。
- 文献に示されている位置は、V層又はIV層にI～II層及びIII層が、約15°以下の傾斜角をもってアバットしているところであり、変位及び変形は認められない。

凡 例

- 3B-2 θ^{10} 音波探査測線 (北海道電力㈱, 2001年)
(エアガン, マルチチャンネル)
- C-11 Δ^2 音波探査測線 (北海道電力㈱, 1997年)
(エアガン(G1ガン), マルチチャンネル)
(チャープソナー, シングルチャンネル)
- B-① $\theta^{15.00}$ 音波探査測線 (北海道電力㈱, 1982年)
(ウォーターガン, シングルチャンネル)
- 後期更新世以降の活動を考慮する断層
- 地質調査所
100万分の1 広域海底地質図による推定断層
- 地質調査所
100万分の1 広域海底地質図による伏在断層
- 徳山ほか (2001) 「日本周辺海域中新世最末期以降の構造発達史」による断層
(矢の向きは、断層面の傾斜方向を示す)
- 活断層研究会
「[新編]日本の活断層」による活断層
1:確定 2:推定
- 地質調査所
「日本地質アトラス (第2版)」による第四紀逆断層
(矢の向きは、断層面の傾斜方向を示す)
- 海上保安庁水路部
20万分の1 海底地質構造図による断層

岡村 (2023) の凡例

- 正断層
- 逆断層 (第四紀以降に活動)
- 逆断層 (鮮新世以降に活動)
- 背斜軸 (第四紀以降に活動)
- 向斜軸 (第四紀以降に活動)
- 背斜軸 (鮮新世以降に活動)
- 向斜軸 (鮮新世以降に活動)



敷地周辺海域の断層位置図 (B海域及びE海域)